

---

# 故郷に帰る途中で

狂信者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

故郷に帰る途中で

### 【Nコード】

N0234M

### 【作者名】

狂信者

### 【あらすじ】

ある一人の大学生、山代寛人は大学帰りの電車の中で、不運にも異世界巡りをしてしまうことに。主人公の性格はヘタレです。しかしヘタレなりに故郷に家族の元に帰るために頑張ります。異世界巡りということでは様々な世界にいくことになります。物語中間には主人公最強になるかも。

この小説は作者の妄想小説です。

このような内容が嫌いな方、また原作主義の方は回れ右推奨。

## 特急異世界行き（前書き）

気の赴くままに書きました。

反省はしてない。後悔はちよつと。

誤字、脱字は特にないと願いたい。

ではどうぞ。

## 特急異世界行き

拝啓。お父様、お母様。あなた方の愛する息子、山代寛人です。確か俺は大学帰りの電車で家に帰ってたはず……。なのになんでこんな何もない砂漠にいるんでしょうか？気温がやばいです。熱いです。干からびます。とりあえず邪魔なジャケットを脱ぐ。

これでも涼しくなるわけがない。飲み物とか持つてゐるわけないし、このままじゃ本当に干からびそう。

で、今気づいたんだが。なぜか俺の隣に愛用の洋弓一式がある。ご丁寧に矢まで揃ってる。もしかして何者かの陰謀でしょうか。

ぶるっ！

え？何この寒気。なんかいつのまにか俺の前に影がかかってるし。ああ、そうか後ろに何かいるんだな。と、能天気な後ろを振り向く俺。

二本の曲がった角。砂漠色の体。自由に飛びまわれそうなでっかい翼。

はい。どう見てもディアブロスです。お疲れ様でした。

「……………オワタ＼（＾o＾）／」

と。人生の走馬灯を頭に思い浮かべると。

「G A A A A A ……」ズズンッ

なぜか急に倒れこむディアブロさん。

「ええ〜っと、なにこの状況……」

まったく訳もわからず一人佇んでいると。なんか遠くから二人組みの鎧姿の男女が走ってくるじゃあないですか。んで俺の前に来たと思ったら。

「すっげー！おまえすげえな！おい見たかよ！こいつ、ディアブロスを倒しちまったぜ！！」

「うん。見た見た！すごいねキミ。そんな弓と矢でディアブロスをやっつけちゃうなんて！」

「はい？」

どうやらこの急に現れた二人は、俺がディアブロスを倒したと勘違いしているようだ。

この状況ヘタレの俺にはキツイ。なんとか誤解を解こう。

「あの〜。勘違いしてらっしゃるようですが、ディアブロスは勝手に死んじゃったのであって俺が倒したわけではないですよ？」

「ええ！？でもそんな弓と矢見たことないし。強そうには見えなけれど（ボソッ）」

「確かに強そうには見えないが（ボソッ）その弓と矢で倒したんじゃないのか？」

おい、てめえら表出る……とは口に出してはいえないが、ああ、  
そうですよ。確かに俺はヘタレですよ。でももうちょっとソフトに  
言ってくれませんか？

「違いますよ。こんな化け物、俺一人で倒せるわけじゃないじゃ  
ないですか。それにこの弓と矢は本来狩猟用ではありませんしね」

「なあんだ、そつかあ。じゃあなんで死んじやったんだろう。」

「寿命かなんかじゃねえの？もしくは病気」

ああ、なんて運がいい俺。生んでくださったお母様、ありがとうこ  
ざいます。

とりあえずディアブロの横でなにやら相談してる二人組みにここが  
何処なのか聞こう。

「あゝ。ちょっと聞きたいことあるんですけどいいですか？」

「はい、いいですよ」

「ここはどこでしょうか？もしくはこの近くに街とがありますか？」

「おいおい。頭大丈夫か？ここはルビア砂漠。知っててここに居た  
んじゃないのか？」

「うんうん。それに近くの街って言えば、ドンドルマしかないけど。  
もしかして記憶喪失？」

はい。聞きなれない単語が出てきました。るびあ？るびあ？え？

俺まさか憑依でもしちゃったの？しかもドンドルマって、モンスターハンターの街の名前じゃん。

しかもこの人たちも見たことあんど。男の方はレウスシリーズ。女のほうはレイアシリーズ。

もしかしたら、俺が気づかないうちに召還のゲートでこの世界に呼び出されたのかな。いやそれだと問題が出てくる。俺を呼び出した召還者がいない。んでもって俺みたいなのへタレを呼び出したところでメリットなんてない。……謎だらけで頭痛い。

Coolになるんだ寛人！この状況をなんとかして乗り越えるんだ！…………。

「ねえねえどうしちゃったのかな？」

「わからん。だがこいつがディアブ羅斯を倒した訳ではないというのはわかったが。見れば見るほど奇妙な格好をした奴だぜ」

「うん。それにこの弓も変わってるよね。もしかしたら違う国からきた人かも」

「確かにそれなら納得できるな。よし、とりあえずいまだにブツブツ言ってるこいつをどうにかしよう」

ああ。やっぱりあれか。俺の乗った電車が特急異世界行きだったんだな。納得納得。

ということはこの世界にも特急俺の元いた世界行きみたいなのがある

るのか？いやわけがわから「おい。とりあえず考えるのはやめて、これからのこと相談しないか？」ああ、はい。いつのまに横にいたのか全然気づきませんでした。

「えー。それじゃあ自己紹介でもしませんか？」

「そういやしてなかったな。俺の名はイゼア、ハンターランクHLは10だ」

「私の名前はクリア、HLは9。よろしくね」

「はい。ありがとうございます。俺の名前は山代寛人です。ヒロトって呼んでください。後俺はハンターじゃないのでランクは0です。よろしく願います」

「ハンターじゃないのか。また疑問が一つ増えたな。まあいい、ドンドルマに向かう道中でヒロトが何者かを知ればいいだけだしな」

「そうだね そうと決まったらドンドルマに向けてしゅっぱーっ！」

拝啓。お父様、お母様。私、寛人はこれからさきどうなるのでしようか。

先行き不安です……………。



## 特急異世界行き（後書き）

疲れた。

やっぱり小説書くのは難しいんですね。  
これからも頑張ります。

## 故郷編（前書き）

連続投稿してしまおう。

今回は主人公の母親サイドです。

一話よりは短いです。

## 故郷編

午後10時。まだ息子は帰ってこない。

おかしい……。いつも遅れるときはメールを送ってくれるのに。こっちからメールを送っても一向に返事が来ない。

心配性の私は息子の寛人に何かあったんじゃないかと思ってしま  
う。

もう後、二時間だけ待ってみよう。大丈夫。ちゃんと帰ってくる  
……。

・  
・  
・

二時間後

帰ってこない。念のため夫にも相談した。私の不安がいつそう大き  
くなる。

警察に電話しよう。大袈裟かもしれないが、関係ない。愛する息  
子のためだ。と、私は急いで警察に電話した。

「はい。こちら某警察署です。どうされましたか？」

「息子が連絡もなしに帰ってこないのです。いつもなら家に帰ると  
きちゃんとメールで知らせてくれるのですが、私から送っても音信

不通で…！どうしたらいいでしょうか？」

「わかりました。では今から何個か質問するのでお答えください」

「はい」

「息子さんのお名前と年齢、通学している大学名、そして通学に使っている駅をお教えください」

「はい。山代寛人。19歳。大学。駅です」

「ありがとうございます。では次です。最後に寛人君からメールが来たのはいつごろですか？また、寛人君の性格を教えてください」

「最後にメールが来たのは午後2時ごろです。内容…というよりは画像が送られてきました。おそらくこれは部活中の写真です。寛人の性格としては、非常に優しい性格をしております。特に夜遊びなどするような性格でもないです」

「わかりました。それではこちらのほうで寛人君の搜索は明日やらせていただきます。随時報告しますので、ご心配かと思われませんが、今一度、寛人君の無事を祈っといってください」

「はい…ありがとうございました」

「どうだった？」

夫が聞いてくる。

「搜索は明日だって。随時報告してくれるみたいらしいから……」

「そうか……。そんなに気を落とすな。大丈夫だ。あいつは俺たちの息子だぞ。… 疲れただろう、さあ、今日はもう寝るといい」

夫がそういうのだから仕方が無い。夫の言うとおり寝るとしよう。まだまだ不安は残るが、警察がああ言ってくれてるんだ、頼りにしよう。

次の日も、次の日も搜索は続けられたが見つからず。

寛人が行方をくらましてからの三日後。あるニュース番組で。

『 大学の二回生である山代寛人君が、三日前に突然姿をくらまし、行方不明に………』

## 故郷編（後書き）

はい。読んでくださってありがとうございました。

今回は特に疲れず、スイスイ書けました。

誤字、脱字。もしくはここはこうしたらいいと思う方は遠慮せず申してください。

## 登場人物設定（前書き）

登場人物を紹介したいと思います。  
情報が少ないので、編集しました。

## 登場人物設定

登場人物？

名前：山代寛人

身長：165cm

体重：51kg

どこにでもいる大学生。性格はヘタレ。  
部活動としてアーチェリーをしていたので弓の腕はそこそこ。

突然、異世界に行ってしまう不運な人間。しかし適応能力は高い  
様々な世界で生き残るために、故郷に帰るために強くなっていきます。

登場人物？

名前：主人公の母親・父親（仮）

身長：不明・不明

体重：不明・不明

正式な名前は決めてません。



母親：主人公のことを溺愛。そしてかなりの心配性。

父親：かなりिकास父親。でも最近腹が弛んできたので、最近はおっぱいのジム通い。

故郷編としてこれからも出していきたいと思っています。

登場人物？

名前：イゼア

身長：175cm

体重：65kg

レウスシリーズで固めてるレウス好きのかなり気のいい人。ハンターとしての腕はなかなか。主人公の師匠的な存在？

しかし相棒であるクリアとは恋人同士。

常イチャイチャしてるときがあり、主人公もウンザリしている。

武器

大剣：炎剣リオレウス

防具

全身レウスシリーズ

登場人物？

名前：クリア

身長：162cm

体重：不明

いわずもがなイゼアの彼女。イゼアのことを好きで仕方が無い。しかし狩ではかなり頼りになるらしい。

武器

ライトボウガン：ハートヴァルキリー

防具

全身レイアシリーズ

早く全身をリオハートにしたいくて事あるごとに桜レイアに挑む。

登場人物が増えた場合、登場人物設定？のほうに書かせていただきます。

## 登場人物設定（後書き）

不定期連載って、何日空けたら不定期になるんだろう。

## ドンドルマの街（前書き）

いまさらですが、最初の異世界はMONSTER HUNTER  
です。

主人公はモンハン中毒者です。

地理はさっぱりなんで、とりあえずドンドルマということにしまし  
た。

よろしくお願いします

## ドンドルマの街

こんにちわ。 山代寛人です。

道中いろんなことがありました。砂漠って怖いところなんですね。暑いし、イゼアにクーラードリンク貰わなかったら俺、干からびてたよ。

しかし、あれですね。ガレオスってのは意外と怖いんですね。ゲーム画面では雑魚だと思ってたのに、実際見てみるとでかいんだよ。

よくディアブロス見て気絶しなかったな。俺。

ああ。あの死んだディアブロスだけど、イゼアとクリアが素材を剥ぎ取りました。

これもナマで見ると結構グロい。

まあ、そんなこんなで、イゼアとクリアには俺が何者で、どこから来たのかは正直に話しました。

二人ともびっくりしてたね。まさか異世界から来たとは思わなかったんだろう。

んで。

30分ほど歩いたら、ちょうど前方に商人の荷馬車が通ったので、ドンドルマまで乗っけてもらうことに。

久々に日陰に入ったので、そのままウトウトして寝てしまった。  
寝る前に見たのはイチャイチャしてるイゼアとクリアだった。(泣)

「寝ちゃったね」

「ああ、疲れたんだろう。疑うつもりはないが、異世界から来たつてのは本当っぽいし。なにより服装が俺たちと全然違う。それにその弓と矢もだ」

「あーちえりー、だっけ？よく見たらこんな形の弓なんて初めて見るし、本人の言うとおり狩猟用じゃなさそう……」

「服装に関しては何も言わないんだな。てつきり欲しがるかと思っただぞ」

「最初はそう思ったよ。でもヒロトの話聞いたら欲しいなんて言えないよ。いきなりこんな世界に来て何も知らない。誰も頼る人がいない。可哀相すぎるもん」

「そうだな……。まあ乗りかかった船だ。俺たちの力がヒロトに必要なくなるまで支えてやるうじゃないか」

「うん それでこそイゼアだね ……じゃあ私たちも寝よ」

「ああ、ドンドルマまで長いしな。おやすみ……」

ガラガラガラガラガタンッ

「痛てっ」

どうやら段差にでも乗り上げたようだ。

「起きたか。どうだ目覚めは？」

「…おはようございます。あまり良くないです」

「あはは おはよう 頭大丈夫？」

「あ、はい。大丈夫です。気遣いありがとうございます」

「うし！なら外を見るといい。ドンドルマに着いたぞ」

イゼアに言われて、荷馬車の中から外を見る。

「凄い…」

ドンドルマの街。ハンターたちの拠点になっている街。豊富な商品と充実した施設が備えられていて、この街には富と栄誉を求めたハンターが世界各地から集まり、情報の交換や交流が深められている。

オンラインゲームでも見たことはあるが、実際見てみるとまったく違う。

広場のような場所に大勢いるハンターたち。皆それぞれが違う武

器・防具を持っている。

それをナマで見れるとは最高の光景だ。

突然異世界に放り込まれたこの世界で初めて、子供のように目を輝かせて見ている俺が居た。

「はしゃいでるところ悪いが、ヒロトにはこの街の最高責任者である大長老に会ってもらう。勿論、ヒロトがどこから来たのかなど、俺たちにした説明と同じ内容を話してくれ」

「了解です。大長老に話したところで俺がこれからどうするかを決めるんですね」

「ああ、その通りだ。まあ大丈夫だ、緊張などしなくても大長老はあらゆる知識を持つてる。もしかしたら過去、お前のような事情をもった人間を知ってるかもしれないな」

マジか。もしそんな人物いたら速効で聞こう。元の世界の帰りかたを。

家族も心配してるだろうし、特に母さん。ああ…今頃ニュースで俺のこと流れてるんだろうなあ。

とか考えながら、アイデアにこの街について詳しいことを聞きながら、大長老のいる建物まで歩く。

見るもの全てが新鮮すぎて、テンションがかなり上がってる。



特に驚いたのが、捕獲したのであろう。リオレウスだ。でかいのかい。

イゼアがリオレウス見て、うっとりしてるが気にしない。

クリアはクリアでいつの間にか入らないし。イゼアに聞いたところ

「クリアなら桜リオレイアのクエストに行っただぞ」

早っ！えっもうですか。確かにクリアからはリオレイアについて、砂漠を歩いてる中散々聞かされたけども、どんだけリオレイア好きなんですか！？

「イゼアは行かないのですか？」

「あー。いつものことなんだが、俺に一言「行ってくるね」って聞こえたらもうどこにもいないんだ。慌てて集会所に行っても、クエストに出発した直後だし。もう半分諦めてるんだよね。それに今日はヒロトのこともあるしな」

「それは…凄いですね。でもとりあえずお礼を言っておきます」

「いって、気にすんな。それにクリアと相談したんだが、このデアブロスの素材全部、ヒロトにあげるつもりなんだぞ」

そういつてイゼアはデアブロスの素材が入った袋を俺に見せてくる。

「マジですか？かなり嬉しいのです」

「ああ、元々はお前にあげるつもりだったんだ。俺もクリアも装備

は間に合ってるしな。…つと着いたぜ。ここが大長老がいる部屋だ」

そこにはかなり大きな扉。それも一流の職人が手を加えたような

「失礼します」

イゼアが扉を数回たたいて言う

「入れ」

イゼアよりもかなり声の低い声が扉の向こうから聞こえた。  
それと同時に威圧感もした。

思わず俺も失礼しますと言ったほどだ。

大長老室に入ってみるとさらに威圧感が増えた。

蛇に睨まれたカエルみたいなの？チラ見でしか見てないけどお強そうな人物が二人。

真ん中には、頭の毛はなく、大層偉そうなヒゲを持ったおじいさん。  
そもそも人間なのか？

この人？が大長老だろう。

「何のようだ」

と、全身をグラビトSシリーズで固めた黒髪の人物が聞いてくる。

「はい。実はかくしかじか……。というわけでして」

イゼアの説明が入る。

決して書くのが面倒というわけではない。読者の方も同じ説明を何回も受けるのは嫌ですよ？

「ふおっふおっふお。なるほどなるほど……。ヒロトくんじゃったかな？」

「はいっそうです」

「君は…これからどうしたい？」

「俺は…故郷に帰りたい。ただそれだけです」

「ふむ、やはりか」

大長老はなにか考え込むようにこちらを見る

「実はの、10年も前じゃったかの、ある一人の男がわしの前に現れての、こう言っくんじゃ『俺はこことは違う世界から来た。お願いがある、俺と共に帰る方法を探してくれないか？』とな」

「それって…まさか」

「うむ、そのまさかじゃ」

予感的中キター！。

「じゃが安心しては行かん。確かにわしは帰る方法を知ってるが、その男が本当に帰れたのはわからんのじゃ」

「つまり、確実に帰れるということではないのですか」

「うむ。残念ながらそればかりは、わしもわからんのじゃ」

「はあ、先行き不安だ……」。

## ドンドルマの街（後書き）

ありがとうございました。

誤字・脱字あったら報告お願いします。

ドンドルマの街？（前書き）

では、さうぞう。

## ドンドルマの街？

「お主に聞かなければいけないことがあるが、いいかの？」

「はい…どうぞ」

「帰り方についてじゃ。わしは先ほど話した男が無事に、元の世界に帰ったのかわからんといったが…。そうじゃな、お主は“電車”というのを知っておるかの？」

「“電車”ですか…？電車なら僕の居た世界では当たり前のように存在していた乗り物です。実際僕もその電車でこの世界に来たようですし」

「うむ。つまりじゃなお主の世界に戻るにはその“電車”が必要というわけじゃ」

「あの、電車とはどういう乗り物なんですか」

すっかり空気になっていたイゼアが尋ねる。

「この時代で言うところ、蒸気機関車じゃな」

「成る程。電車とは蒸気機関車のことだったのか」

「で、その“電車”は一体どこにあるのですか？」

取り合えず強引に話を戻す。

「うむ。それが問題なんじゃ、“電車”のある場所に行くにはあるチケットを手に入れなければいかん。難易度はそうじゃな……。Gクエスト並みと言つところかの」

はい、きましたこれ。世界つてのは理不尽極まりないですね。泣きたくなってきた…。

「そしてじゃ、“電車”のある場所、ラグム火山じゃ……」

「ええー！ちよつマジですか！？大長老！ラグム火山はミラバルカ  
ン生息している土地じゃないですか」

イゼアさん、それホントですか？ああ、お母様、お父様。私はもう二度と帰れなさそうです。

「落ち着くんじゃ、イゼア。イゼアの言うてるのは、火山の奥地のことじゃが、“電車”はその手前の場所にあつてな。奥地よりは危険度が低いのじゃ。油断は禁物じゃがの」

「それでも！ラグム火山にはイーオスやガブラスなど、まだまだ危険なモンスターがいます！ハンターでもないヒロトが行くのは不可能な話です！」

そりゃそうです。俺だって無理だと思います。

「何も今すぐ行けとは言つておらん。そこでじゃイゼアよ。お主にヒロトの師匠を頼みたい」

おりよ？イゼアが俺の師匠になるのか？それは願っても無いことだが、イゼアが了承するかどうかだな。



「師匠…ですか？」

「うむ。イゼアのHLは10じゃったかの、弟子を持つには十分なHLじゃ。相棒であるクリアもあるんじゃないから万事オーケーじゃ」

「イゼアさん、僕からもお願いします。僕をあなたの弟子にしてください。いつか必ずこのご恩はお返しします」

「うむむむむ……」

かなり考え込んでるようだ。まあそりゃそうだ、いきなり今日会った人間を弟子にするんだ、悩むのもむりはない。

「…どうじゃ？わしからも出来るだけのサポートはするつもりじゃ」

「はあ…わかりました。…ではこのイゼア！ヒロトの師匠に成らせて頂きます！言っとくがヒロト！俺は甘くねえからな？ニヤ」

素敵な笑顔がとても怖いです。ありがとうございました。

「はい！これからよろしくお願いします！イゼアさん…じゃなくて師匠！」

「うむうむ。では今日のところは開きにするかの。また明日ここに来るといい」

「はい、今日はありがとうございました」

「ではまた明日の、そうですね。昼ごろにお伺いしても？」

「うむうむ。いいぞい」

「では」

バタンッ

「ふうー、取り合えずクリアが帰ってくるまで、ヒロトの武器と防具をどうするか決めねえとな」

「はい、わかりました師匠」

「うし、んじゃまず俺が泊まってる宿屋にでも行こうかね」

「クリアさんはどうするんですか？まだ帰ってきてないみたいですけど」

「いや、その内帰ってくるだろう。いつもそうだしな」

結構適当なんだなイゼアは。

賑やかなドンドルマの街をイゼアに案内されながら、宿屋を目指して歩くと、路地裏がふと目に入った。目を凝らしてよく見てみると何か黒っぽいものが動いているのが見えた。

「師匠、ちょっと待ってください。あれ何ですか？」

「？何だ？……おいおい！なんでこんなところにリオレウスの赤ん坊がいやがんだ！？」

師匠がそう言うので、俺も見てみることに。確かにリオレウスの赤ん坊のように見える。が、汚れているせいか、体表が黒い。よく見れば所々赤い。ケガでもしてるんだろうか。

「きゅ」

可愛い…かなり萌える。

「…どうしますか師匠？」

「……はっ！ああ、ど、どうするべきか。そうだな一旦、ヒロト、お前の着てる服で丸めて抱えるんだ。見えないようにな？こんなところにはリオレウスの赤ん坊がいるなんて知れたら大変だからな」

「了解です」

つと、このジャケットはつい最近買ったばかりの服なんだが、仕方が無い。この子のためだ。

ジャケットをリオレウスに巻いてる途中「きゅ」とか聞こえた。  
…可愛いすぎる。



## ドンドルマの街？（後書き）

次回から少し急展開になる予定。

## ドンドルマの街？（前書き）

文才がほしいです…。

## ドンドルマの街？

ジャケットに包まれたレウスの赤ん坊を持ちながら、無事に宿屋に着くことができた。

知り合いなのか、宿屋の主人に気軽に話しかけるイゼア。どうやら俺のことを話しているようだ。

その風貌は大きな体。ヒゲを短く剃り、見た目からしてかなり怖そうな40代風の男。

時折こちらを目を細めて見てくる。

「つつーわけなんだ。だからこいつのための部屋をもう一つ貸してくれねえか？」

「あいよ、イゼアの親戚のガキなら金はいらねえ。好きなだけ泊まっていきな」

「サンキュー、おやっさん。いつか必ず礼は返すわ」

どうやらイゼアは俺のことをイゼアの親戚と話したようだ、宿代いらないうてかなり太っ腹だな。

見た目との印象が全然違う。まあ甘えるでしょう。

「僕からも。ありがとうございます」

「おいおい、遠いところきたんだろ？礼なんてそのうち返してくればそれでいいさ。ていうか坊主、珍しいものもってんな？その弓と矢はお前の故郷のものか？」

「はい、そうです。まあこれではモンスターは倒せませんけどね」

「なら、大方弓の練習用武器だろうな」

「はい、そう思ってもらって構いません」

「話は済んだか？悪いがおやっさん、こいつにこの国について話さないといけない事があるんで、もう部屋に行かせて貰ってもいいか？」

「あいよ。坊主、知らないこと・わからないことがあれば俺からも教えてやるから、これからよろしくな」

宿屋のおじさんはそう言って、俺のほうを見て笑いかける。

「はい。ありがとうございます」

イゼアに割り当てられていた部屋は小さいが、人一人で住むには十分なスペースがある。俺に割り当てられた部屋もこの部屋と同じ構造をしているらしい。

部屋に入っすぐ右側には大きな箱。恐らくアイテムボックスだろう。現にイゼアがその大きな箱から紙のようなものを出している。地図だろうか？

左の奥に簡素だがベットがある。



この宿屋は一泊200G。一週間泊まりで1000Gだそうだ。  
他の宿屋よりかなり安く、おじさんもかなり優しいので結構、  
人気の宿屋らしい。

取り合えず、ベッドの上にリオレウスの赤ん坊を置く。どうやら  
眠っているようだ。

「寝てるのか？まあいい、起きたらこれを飲ませてやれ」

受け取ったのはビンに入った緑色の液体。回復薬だ。  
イゼアから回復薬を受け取り無言で頷く。

「おし、なら当初の予定通り、武器と防具についてたが。俺のお古  
があるが…見てみるか？」

「お願いします」

俺の言葉を聞いてニヤつと笑い、アイテムボックスから取り出し  
てきたのは、ハンターヘルムだった。

「これは俺が駆け出し時代のころの愛用の防具でな、レウス防具に  
変えるまですつとこのハンターシリーズだったよ」

それはある意味凄いことだと俺は思った。いくら愛用の装備だっ  
たとしても限界がある。それにイゼアはこのハンターシリーズでレ  
ウスを倒したんだ。

ハンターランク  
確かHLは20までだったはず、イゼアは10だったな。恐らく  
ランクが低いだけで、実力は他のハンターたちよりも高いようだ。

「というわけだな、俺からヒロトにこれを進呈してやる。感謝しな」

受け取る時にちゃんと「ありがとうございます」とお礼を言うのを忘れず、手にとって見る。

ハンターヘルムは所々、黒くなっており幾戦の戦いの痕がある。

俺もこの人たちの戦いの中に入っていくのかと思うと、手が震えた。

じーっとハンターヘルムを見てみると、いつのまにか俺の目の前にハンター装備一式が並べられている。ボーっとしすぎたようだ。

「どうだ？初めての防具は？」

「かなり新鮮ですね…。一度着てみてもいいですか？」

「ああいいぜ。まずは一度、自分で着てみな」

「はい」

最初は手から嵌めてみる。ずっしりとした鉄の感じがする。サイズが合ってるか、手をグーパーする。……ピッタリのようなのだ。

次に足、腰、体、頭と次々に着けていくが、何も違和感なし。

「…ピッタリみたいだな。なら問題はねえ、次に武器についてだがきゆるるる」お？」

「起きたみたいですね」

あら、可愛い。小さな体をこちらに向けてわずかに首を傾けてい

る。

回復薬を小さな皿のようなものに流し、赤ん坊の前におく。コキユツコキユと静かに飲んでいる姿を見ると意識を失いそうなほど可愛かった。

イゼアも鼻血を出してるし。まあ、おいといて。

回復薬を全て飲んだレウスの赤ん坊は小さく欠伸をして、もう一度夢の世界に旅立ったようだ。

よく見てみると、所々赤かった箇所もすっかり治ったようだ。回復薬恐るべき。

「また、寝ちゃいましたね」

「あ、ああ。何があったかわからんが疲れていたんだろう」

と、鼻血を布で拭き取りながら答えるイゼア。

「まあこの赤ん坊はおいおい何とかすればいい……。ヒロトの武器についてだが、せっかくディアブロスの素材があるんだ。これを有効活用すればいいと思う」

「ディアブロス関連の武器となると骨系の武器ですか？」

「わかってるじゃねえか、ヒロトがもし大剣を選ぶのなら、ゴールムブレイド辺りまでだな」

「一つ聞いてもいいでしょうか？」

「なんだ？」

「僕は今、ハンター装備一式を装着してるわけですが、俺自今も重量に負けないように頑張ってるんですが…。要するにですね、重量はどのくらいなんでしょう？特に大剣となると凄く重そうなイメージがあるのですが、僕の筋力でも持てるのでしょうか？」

「ふむ…、確かにヒロトの言うとおり、大剣となるとそれ相応の筋力が必要となる。だがしかし！俺はヒロトの師匠だ！その辺はぬかりない！」

「はあ、ありがとうございます」

取り合えず安心するが、安心したせいか、大きな欠伸が出てしまった。

「眠いか…、まあそうだろう。今日一日色々あったんだ。ここまで持ったのが凄いくらいだしな」

「はい。すみませんが、今日のところはこのへんでいいですか？」

「おう。ヒロトの割り当てられた部屋は、この隣の部屋だしな。ゆっくり休みな。…っと一応だがこのレウスはお前が管理しとけ」

「へ？マジですか？」

「マジだ。元々お前が拾ったようなもんだ。弟子のものを奪うようなことはしねえ。責任もって育てろ。明日になればもう一度大長老の所に行くんだ。そのときに一緒に持っていけばいいしな」

「わかりました。では今日はありがとうございました」

軽く頭を下げてイゼアの部屋を後にする。

自分の部屋に入り、ベットの隣にあるイスの上にレウスをそっと置く。

俺は俺でハンター装備を全て脱いでからベットに倒れこむ。

元々の疲れもあったのかすぐに眠ることができた。

## ドンドルマの街？（後書き）

一向に話が進まないですね。

見てくださってありがとうございます。

# ドンドルマの街？（前書き）

じいじ。

## ドンドルマの街？

「きゅるー！」

「痛ったああああああ！」

朝っぱらか胸に激痛が走る。

必死に胸を押さえて、手を目に添えて泣きそうになるのを耐える。

ん？今気づいたが、何か俺の上に乗ってるようだ。

よく見れば、昨日隣のイスに乗せてあったレウスが、いつの間にか俺の体の上に乗っている。

レウスがもう一度、俺の胸をその小さな口で突付こうとするが、そうはさせない。素早く体を起こしてレウスを抱き寄せる。

「ふうー。こりゃ、こんなことしちゃ駄目だぞ」

と、言えば首を小さく傾けるレウス。本当にわかってるのか不思議だが。

しかし、この子はどうやってイスからここまで移動したんだろうか。若干の疑問が残るが……。どーでもいいや。

くう〜

「……腹でも減ったのか？」



「きゅ？きゅー！」

ふむ。理解してるっぽい。後でイゼアになんか頼もう。

「そうだな…後でなんか食べ物持ってくるから少し待っていてくれないか？」

レウスの小さな頭をなでなでしながら言うしてみる。

「きゅー！」

了解！…とでも言うように返事をする姿も可愛いな。

んじゃ取り合えず、イゼアにおはようって行ってくるかね。

コンコンッ

イゼアのいる部屋をノックする。

「おーう、入ってきていいぞー」

寝ぼけてるのかな？何とも締りの無い声だ。

「…おはようございます、師匠」

「おう、おふぁよう」

ふむ、完全に寝ぼけてらっしゃる。

「……出直してきましようか？」

「ああ、いや。んなことなくていい。……《バチイ！》よし、大丈夫だ」

結構な音を出して頬を叩いた師匠。ちよっち涙目になってたようだが…。

「おはようー ヒロトくん」

「おはようございます…クリアさん。いつ戻ったんですか？」

「ん？昨日の夜だよ。ヒロトくんがイゼアの部屋から出たのも見てたしね」

気づかなかった俺が悪いっぱい。

で。

それからは朝食を食べに行ったが、出てきた料理が『特産キノコスープ』『ガッツチャーハン』の二種類だった、それでも現代日本出身の俺にはかなりの量だったので、残した料理はレウスにあげることに。

そっからはクリアもいるので、昨日イゼアと大長老のところに行

ったときの話しなどして、時間を潰していった。  
ちなみに、レウスは料理を食った後はまた寝てしまったようだ。

そろそろ大長老のところに行く時間帯になった。

今度はジャケットに包まれたレウスを胸に抱き、イゼアと共に向かう。勿論クリアも同行。

すっかり空気になっていた俺の弓と矢も忘れず持っていくことに。

イゼアはいつも通りの全身レウス。

クリアは昨日までは全身レイアだったが、昨日の桜リオレイア討伐によって所々、リオハート装備に変わっていた。

俺の装備は昨日、イゼアに貰った全身ハンター装備。一応武器は愛用である弓ということに。

そして俺は今、周りが深い森になっている密林にいる…。隣にはレウスが寝てるが。

なぜこんなことになったのかと、頭の中をフル回転させる。

――大長老室

「失礼します（ ）」「」

大長老室の硬い扉を開けると、昨日と同じ位置に大長老が座ってらっしゃる。

「ふむ、来たようじゃな。…っと、どうやら今回はクリアも来たようじゃが、ヒロト君。その手に抱えておる物はなんじゃ？」

「あ、はいっ。この子は昨日、街の路地裏で見つけたレウスの赤ん坊です。少し怪我をしていたので宿で治療し、今後この子をどうするかを聞きたくて持ってきました」

「…今その子は寝ておるのかの？」

「はい、食事を済ませた後、ぐっすりと」

俺の言葉を聞いた大長老は手を顎にのせて、何かを考えるような仕草をする。

イゼアとクリアを見た途端、二人に手招きをするが、何か嫌な予感しかないのは何ででしょうか？

チラチラとこちらを見てくる、三人。

三十分ほど話していたのだろうか、イゼアとクリアがこちらに向かってくる。

二人の目は何か同情するような目…。

イゼアがそつと俺の肩に手を乗せて一言。

「頑張れ……」

クリアも。

「大丈夫。きっとヒロトくんなら生き残れるから」

さっぱり意味がわからないから、大長老に何があったのかを聞こ  
うとした瞬間。

頭かなりの衝撃が走り、そこで俺の意識は途切れた……。。

ドンドルマの街？（後書き）

次回からは密林で修行編です。

## 密林サバイバル（前書き）

どうぞ。

## 密林サバイバル

取り合えず泣くのはやめて状況確認しよう。

先ほど拾った手紙をもう一度見てみる。

『おはよう。

この手紙を見ているということはまだヒロトが生存しているということ。

俺は一応はお前の師匠だが、いきなりクエストに行っても精々困役ぐらいにしかない。

そんな役目はお前も嫌だろうから、任務をやる。内容はよく読んで理解しな。

まあ大丈夫だ。密林と言っても比較的 안전한密林を選んだ、出てくる火竜といってもイヤンクックくらいだ。

く密林サバイバルく

その巻：二ヶ月、密林でレウスと一緒に生き残ること。以上。

密林の外に出た瞬間、任務失格として迎えには行かない。

では健闘を祈る。イゼアより』



思わず破り捨てようかと思ったが、手紙の右端に『この手紙を破り捨てる。もしくはなくした場合も任務失格となるので気をつけるように』と書かれていたので、丁重に保存することにした。

俺は今、気絶する前と同じ格好をしてる。違う点といえば、恐らくイゼアが持たせたんだろう。大きなコンバットナイフだ。後はサバイバルに必要な水筒やら火種石などなど。しかし現代日本で育ってきた俺にはサバイバルの経験なんてない。

それに一緒に付いてきたレウスも守らなければならない。比較的安全な密林といっても、俺からすれば十分危険なのだ。

一時間程歩いただろう。俺はまず寝床を探そうと思ったが、一向に見つからず。

途中、ランゴスタに出くわしたときは必死で逃げた。見た目1メートルぐらいあるんだぜ？逃げないほうがおかしい。

しかもレウスを抱えながらなので、余計しんどかった…。

もう一時間程歩いたことで洞窟のような場所を発見。中はそこまで広くなく、焚き火をしたような跡があったが、誰かがここを寝床代わりにでも使っていたのだろう。

レウスを比較的平べったい岩の上に乗せ、俺自身も座る。途中拾ったハチミツとアオキノコを食べるために、なぜかジャケットのポケットに入っていたライターで火をおこす。

ああ、そうか。いつか忘れたが友達にタバコを勧められた時があったつけ。その際にポケットにライターを入れっぱなしにしていたのだろう。

先程起きたレウスに、ハチミツと焼いたアオキノコを食べさせる。レウスは肉食系だと思っていたが、どうやら何でも食べるらしく、俺の粗末な料理でも嫌々せず食べてくれる。俺自身も作った

料理を食べたが、酷い味だ。ハチミツなんて原液をそのまま飲むんだ味が濃すぎて吐きそうになったくらいだ。

食事も終わり、やる事がなくなった…。

いや、やることは山のようにあるが、まず身近なことを先に片付けていこう。

レウスの名前だ。このレウスは俺に懐いているらしく、今は俺の膝の上に乗っている。軽く撫でてやると「きゅ〜」と可愛い声を上げるので、俺の頬が自然と緩む。

さて、名前を決めるということはある意味難問だな。その生物の一生の名前を決めるんだ、下手に変な名前を付けてみる、後で必ず後悔する。

散々悩んだ結果、『ギルバード』にした。

この名前は俺が、MHP2Gをやってる時のオトモアイルーの名前だ。少し中二病臭いが別にいい。この世界に中二病のことを知ってる奴なんていないと思うし。

名前を付けてあげた時のレウスは嬉しかったのだろう、俺抱きついてきた。

しかし、賢い子だな。まるで俺の言葉を理解しているようで、頷くような仕草をするときもある。

さて、名前も決めたことだし、少し外に出て密林を探索しよう。ギルバートは置いてかれるのが嫌らしいので、肩車のような形で連れて行くことに。

弓と矢は邪魔なので置いていくことにした。

幸い水場はすぐ近くにあり、持ってきた水筒で水は確保。水場は軽い湖のような形になっており、魚もいるようだ。後日釣竿でも作って釣ることにしよう。

取り合えず安心したので、一度洞窟に戻ることに。戻るときにハチミツやら、キノコやら忘れず採取していく。

クモの巣は何かに使えるなと思い、ツタの葉と共に持ち帰り。後で調査でもしてみよう。

何も問題なく採取もしながら洞窟に帰ってたんだが、ガサッと音がしたので振り向いてみると、モスと遭遇した。

頭の上のギルバードが「グルルル」と低い声を出した。モスとい

えどギルバードはまだ子供なので怖いのだろう、かなり警戒している。

しかし、俺はまったく怖いと思わなかった。というか食べてみたいと思っただけだ。

ギルバードをそつと下ろし、俺は落ち着いてナイフを抜く。

モスはキノコに夢中でこちらを完全無視。

チャンスだと思い、後ろからモスの体にナイフを深く刺す。

瞬間、弾けるようにモスがこちらに振り向き威嚇する。ナイフによる一撃が効いたのか若干フラフラしてるが。

それでも俺を敵だと認識しつつ、突進の体制に入ろうとしている。

モスも突進は火竜とは全く威力は違うが、それでも直撃すると何本か骨を持っていかれるだろう。ましては俺は今日が始めての狩。直撃など受けたらきつと、パニックってしまい運が悪ければ逆に命を落とすだろう。

ならばモスがこちらに突進する前に倒してしまえばいい。そう考えた俺は真つ先にモスの後ろ側に回りこみ、もう一度ナイフで刺す。一度ではまず倒せないの、我武者羅に刺しては切り裂く。

そうしているとモスが静かに横に倒れた。我武者羅だったので俺の息は酷く荒い、そして初めて生き物を殺してしまったという思いで頭の中がぐちゃぐちゃになり、その場で吐いた。

ギルバートが俺を心配してくれたのか、俺の頬を舐めてくれた。

……少し気が晴れたようなきがした。

それからは大変だった。

なんたつて俺が我武者羅に攻撃したせいでモスは血まみれだ。血を洗い落とすためにモスを引き摺りながらも一度先程来た湖に行き、血を洗い落とした。

洗い落とした後はジャケットにモスを軽く包み、ギルバードは肩車で。

今回は何も遭遇せず、寢床である洞窟に帰ることができた。

焚き火でもう一度火で起こし、ナイフでモスを斬る。斬るまでにかなりの時間を費やしてしまったが、生き残るためだと自分に喝を入れ、バラバラにしていく。

モスのシンボルである頭の石の部分だが、切り落とし、水で軽く洗った後は皿として代用させてもらった。

原始人みたいだが、バラバラにした肉は木の棒に刺し、火に当てるように置く。

肉の良い匂いがしてきたので、一番はギルバードに与えた。

ずっと我慢していたのだろう、口には涎が大量にあった。やはりレウスの主食は肉なのだろう。

俺も食べてみたが、やはり味は薄かった。が、アオキノコに比べると大分ましだった。

ギルバードは満腹なのか、俺の胡坐の上に載ってきて寝息をたてた。

何分かギルバードを撫でていたが、俺にも眠気がやってきたのでそのまま寝ることに。

全く…疲れた一日だった。

密林サバイバル（後書き）

ふひーっと。

やっと書けた。

## 密林サバイバル？（前書き）

取り合えずどうぞ。



密林サバイバル？

夢を見た。

俺の家族や友人が、警察に取調べを受けているんだろう。そんな光景だ。

で、俺は、その人たちを空から眺めている。

ここで俺の夢は終わりだ。

なんともかなり短かったが、なにかとても哀しい感じがした。

密林サバイバル三日目である。

ギルバードを起こさないように隣の水筒で顔を洗う。

今気づいたが、いやに体が痛い。

昨日、慣れないことをしたせいかな、筋肉痛になったようだ。

防具も着けながら寝てしまったし、そのせいもあるんだろう。

しかし、防具を着けずに寝て襲撃された時のことを考えると、やはり着けながら寝たほうがいいのかもしれない。

要は”慣れ”なんだと思う。

んなわけでサバイバル三日目ですが、今日は昨日作った釣竿を試してみる、この洞窟の中で砥石を探してみる、だ。

早速行動開始したのでギルバードを起こす。

まずは砥石だが、勘で在りそうな所を探したら見つかった。

（おいおい、こんなに早くに見つかったーのかよ）

と思いもしたが、万事オーケーなので気にしないことに。

んで。

次は釣竿の件だが、釣った魚をどうするかという事で、洞窟外の木の皮を剥いで試行錯誤しながら簡単な網状の袋みたいなの作った。

強度は完璧みたいだが、見た目が変。

ぶっちゃけどうでもいいが、俺はA型なので神経質なんだ。  
というわけで、再度やり直し。

一時間ぐらい経ってようやく納得のいく作品ができた。  
つーわけで遅いが湖で釣りでもしてこよう。

湖に着き、ベストポジションを見つけ隣にギルバードをちょくと置いて。

いざ、釣り開始。

あらかじめエサ袋は作り済み。中にはイモムシとかイモムシとか釣りミミズetc…

念のためゲーム中でもよく使用した釣りミミズで実験してみることに。

はい、魚が食いつきました。

というわけで。

「フイイッシューー！」

隣にいるギルバードがビクンツとなっていました。そんなの関係ねえ！

こんな感じでどんどん釣っていきましたださ。

（やばい、釣りすぎた）

うん。本当に釣り過ぎた。

小さな山が出来てるよ。少し調子に乗ってごめんなさい。

ギルバードが何匹か食べてたけど。そんなに腹減ってんのか？

昼飯ということで、ギルバードには満腹になるまで食べてもらった。

いっぱい食べてもらったお陰でなんとか持ち運べる量になりました、ということで早速朝に作った袋にバンバン入れていく。

キレアジが思いのほか取れたのが、嬉しかったがハリマグロや眠魚が釣れたのも嬉しかった。

日本人なので、やはり魚料理は欲しいのだ。

いつか大食いマグロやカジキマグロ、ドスハリマグロも釣ってみたい。

思いのほか手に入れたので、一旦洞窟に帰ることに。

んで、洞窟に着いてからはギルバードと共に魚料理を食べる。

先ほどもナマで魚をバンバン食ったギルバードも少なかったが、食べてくれた。

こんな感じで食料を取っていけば、二ヶ月生き残るのは余裕だな。

と、思っていた時期がありました。

予想以上にきつい。毎日毎日、肉や魚、キノコしか食べてない。

他の物も食いたいという欲求に駆られる日々。

あれから、一ヶ月が経ったんだが。

二週間が過ぎた時だろう。ストレス的なもので発狂しそうになった。

気が動転しかけて、洞窟外に出たらランゴスタやコンガに殺されそうになった。

ギルバードが小さなブレスを吐いて相手が油断したところで、死ぬ思いで逃げて帰ってきた思いでもある。

しかし幸運なこともある。

まだ、イヤンクツクにもランポスにも出会えてないことだ。

あの状態でもし遭遇したら、あっという間に俺は死んでるだろう。

とにかくヤバイ状態なのだ。

取り合えず二三日は洞窟外にも出ずに過ごそう。

食料もかなり保存してあるので、餓死することはない。

一度この状態を治してから再度密林に出よう……………。

三日後。

久しぶりの密林に出る。

あれから俺はなんとか体調を普通に戻し、太陽のある外に出た。

でも俺ってやっぱり運が悪いのかな、おかしい、日本では普通だったのに、この世界に来たから急に悪くなったようだ。

何が起こってるのかとゆーと。

――五分前

（よっしゃー、体調も良くなったし久々に外にでるかな…）

ドスンッ

（ん？なんか音がしたな。「クカカカ」はい？）

こんな感じで現在イヤンクックと睨み合い真っ最中。

かつて目の前にいたディアブロスとはあまりに違う迫力だが、これでも中型モンスター。俺の身長よりでかい体。赤い鱗を纏い、大きなクチバシに大きな耳。

そして俺を食い殺そうと感ぜられる目だ。

肩車してるギルバードも声にならない威嚇をしている。

相手もまだ何も仕掛けてこない。

俺とイャンクックの間で睨み合いが続くが、それをぶち壊したのはギルバードだ。

ギルバードは突然、イャンクックに向かってブレスを吐いた。今まで見たブレスよりも遥かに大きかったが。

相手は油断していたようなので、直撃し後ろに大きく仰け反った。

途端。

「クカカカカ」と、こちらを思い切り威嚇しながら大きなクチバシと共に突撃してくる。

ギリギリで避けれたが、ここからがヤバイ。

俺の今の武器はコンバットナイフだけ、切れ味は昨日研いだおかげで大分いいほうだが、果たしてイャンクックに通用するかかわからない。

再びこちらを睨み、突進体制に入ろうとしてるイャンクックだが、俺も今までこの密林で遊んでたわけじゃない。

俺は自分自身の戦闘体制を編み出していた。

腰のナイフに手を添え、左手を地面に付いて、姿勢をかなり低くする。

野生スタイルみたいな感じ。最初は全然慣れなかったが、今では

すっかり型にはまってる。

この戦闘体制で、コンガ四匹と同時に戦い、勝利したこともある。

ここからが本当の戦いだ！みたいな感じ。



## 密林サバイバル？（後書き）

普通免許試験って結構難しいんですね。

90点以上取らないと合格ってのも厳しいですよね…

## 密林サバイバル？（前書き）

ちなみに戦闘中のギルバードですが、落ちないように肩に思い切りしがみついています。

## 密林サバイバル？

あれから、俺はイヤンクックとの間で激しい戦いをしていた。

肩車しているギルバードを落とさないように必死で気遣いながら、傍から見ると正気じゃない戦い方だ。

初めてのイヤンクック戦が、レウスの子供を庇いながらの戦闘。相手の攻撃を避ける俺を褒めてくれ。

さつきからずっと「見える！俺にも見えるぞ！」とかブツブツ言いながら戦ってる。

んで、相手の攻撃を避けながら、少しずつナイフで攻撃してたんだが。

ずーっと同じところを斬りつけてきたのでやっと赤の鱗が剥がれ血が出始めた。

これはチャンスだと思った俺は。イヤンクックがブレスを吐いた瞬間に相手の懐に入り、傷口に深くナイフを刺した。

結果。

「クキヤアアア！！！」

と、悲鳴のような声をあげ、俺を攻撃してきたが、さらに俺は避ける。

ちなみに戦闘BGMは『モンスターハンター 狩猟音楽集』の『密林の無法者』だ。すみません、どうでもいいです。

俺がなんとか攻撃を避けながらも、肩にいるギルバードがブレスを放ってくれるお陰でちゃんとした戦闘になっている。俺のこの戦

闘スタイルはチキン戦法だからな。んでギルバードが補助的な役割を持っている。

（案外、余裕じゃん。勝てるな…）

一瞬の油断が悪かったと思う。イヤンクツクの突進に掠めてしまった。その衝撃でギルバードが肩から転落してしまった。

直撃ではないが、初めてのイヤンクツク戦にて初めての攻撃を食らってしまった。慌ててギルバードを肩に担ぎなおす。

先日コンガの突進を食らってしまったこともあったが、威力が全然違う。さすが、中型モンスター！

（ちょっとやばいかも……………）

いくらこっちのほうが攻撃回数を上回ってるとはいえ、こちらの攻撃は向こうに対してほんの少ししかダメージを与えていないだろう。掠ったのは左手……。利き腕じゃないだけかもしれませんが俺は再度、構えなおす。

イヤンクツクが突進してくるが、左手の痛みのでいで体が思うように動かない。必死で避けながら、こいつを倒せる方法を考える。

目が霞みそうになるが、生き残るためにはこいつを倒さなければならぬ。

必死で考えた結果。狙うは脳と心臓のどちらか。

脳は恐らく、大きなクチバシと大きな耳の間にあるだろうが、心臓の位置がわからない。

ので、狙いは脳。

しかし、脳を狙うのにはいくつかの選択肢がある。

？ 今までどおり相手の攻撃を避けながらも徐々に頭を攻撃していく。

？ 相手がブレスを吐いた際、頭に飛び乗り勘で脳的位置を決めて深く刺す。

？ ？？を同時にする。

これが、今の俺で考えうる選択肢。？は無理だ、体力が続かない。？は不可能。となると？になる。

命がけの選択肢だが、やるしかない。

――十分後

なかなかブレスを吐いてくれない。さっきから突進 旋回ばかりだ。

このままじゃ俺の体力が続かない。万事休すか……。

と、思ったが。

何回突進・旋回を繰り返しても俺に攻撃が当たらないせいか、イヤンクックがブレスの体制に入りやがった。

このために少しづつ研いでおいたナイフの力が発揮される時が来た！

「膳は急げつつてな！！」

イャンクックがブレスを吐く体制になるのを見計らって、頭の上に飛び乗り、全力で脳の位置に突き刺す。

突き刺した瞬間。イャンクックは声にならない悲鳴を上げたが、関係ない。

相手が何を喚こうが、俺は全力で突き刺すまで！イャンクックの血が飛んで俺の顔に付着するも俺は刺すのをやめない。最初は硬い鱗に守られてあまり刺さらなかったが、ちよつとずつちよつとずつ刺さっていく。

火事場の馬鹿力的なものでも発動したんだろうか、万力の力を持つて俺は刺す。

イャンクックも必死に俺を振り落とそうとしているが、足で思いっきり固定しているので落ちない。

二分程続けたらどうか。イャンクックが静かになっていくのがわかる。

イャンクックが倒れそうになったので、俺は慌てて地面に降り立つ。

ズズンツと、その大きい体が横に倒れこんだ姿を見て確信する。

俺は倒したのだと。このナイフで。

後今気づいたのだが、戦闘をしたのは洞窟の近くだったので、俺

はすぐさま洞窟に帰り、丸出しの岩の上で意識を失った。  
ギルバードも疲れたようなので俺に重なるように倒れこんでいた  
……。

## ードンドルマの街

「……以上で、報告を終わります」

「うむ、ご苦労じゃった」

ヒロトとイヤンクックが死闘を行い、勝利したこと情報をヒロトを監視していたハンターが大長老に報告していた。

今、大長老室には三人の人物がいる。一人は勿論、大長老。もう二人はイゼアとクリアだ。

報告を聞いている時の三人は酷く驚いている様子だった。

だが、当たり前のことだ。まさかあの小さなナイフで『怪鳥イヤンクック』を単身で倒したのだ、しかもレウスの子供を肩車しながら。

「予想以上のようじゃな、イゼアよ」

「はい、まさかあんとき持たせておいたナイフでクックを倒してしまうとは驚きましたよ」

「もしかしたら、すっごい狩の才能を持つてるかもしれないね。ヒロトくんは」

「うむ、その通りじゃ。それにレウスの子供……ギルバードじゃったかの、その子を庇いながらなんぞ並みのハンターでは両方死ぬか、どちらかが死ぬかというのに両方とも無事じゃ。それに傷はあるものの、たいしたことのない傷ばかり。本当に驚かされる……」

「将来凄腕ハンターになるかもしれませんよ」

「そうなった時は、正式にお主のPTに入れるのじゃな」

「ええ、勿論です。ですが、その時のヒロトのランクはいくらほどにするんですか？」

「6……ぐらいでいいじゃろ。少々高いが、初めての戦闘であれだけ動けるんじゃ。心配ない」

「むむむ……なら抜かれないようにしなくちゃ」

「そうだな俺は今日、HL12になったばかりだがクリアも頑張れよ？」

「うん 大丈夫」

「話は終わったかの？……ならば後もう数十日でヒロトを迎えに行かなければならん。その日まで二人とも己を高め、尊敬される

人になつとくように。恐らく、単身でしかも短時間でイヤンクックを倒して少々気持ちが高まっているだろうしな」

「了解です（しました）」



「うむ、では解散じゃな」

目が覚めた時の筋肉痛はマジでやばかった。今の俺は兜と鎧、腰の部分の装備を脱いで軽装状態だ。

そのままの姿で寝転がりながら、保存していたコンガの肉を食っている。隣にはギルバードもいる。

もう後一時間ここにいて、マシになったらイヤンクックの死体をここに運び込もう。

素材を剥ぎ取るのを忘れていたからな。コンガに死体を取られないことを祈って俺は、二度寝を実行した。

あれから二時間が過ぎて俺はようやく動き出した。寝すぎました…。

昨日の戦闘場所にドキドキしながら行くが、ホッとした。昨日の状態のままだった。

つーわけで、俺はイヤンクックの首を持って引き摺るように運んでいくものの、精々数センチずつだ。すごく……重いです。

三十分ぐらいかかってようやく洞窟に辿り着いたので、剥ぎ取りタイムというつ。

・・・しばらくお待ちください。

全身くまなく剥ぎ取った結果、『怪鳥の甲殻』八枚。『怪鳥の鱗』十二枚。『鳴き袋』三つ。『怪鳥の耳』二枚。『怪鳥の翼膜』六枚。『巨大なクチバチ』一つ。『竜骨【中】』四本。以上だ。

ゲームの中では一部しか手に入らないが、少ししか手に入らないのは嫌なので、全身剥いでやった。まあそのお陰で途中何回も吐きかけたが。

ちなみに竜骨は取り出すのに思いのほか苦労した。まあどうやって取り出したのかはご想像にお任せします。

この後は昨日の戦闘でボロボロになったナイフを研ぎ直したりして今日は終わりだ。

残り数十日でこのサバイバルが終わることを思うと、少し名残惜しさが湧いた。

## 密林サバイバル？（後書き）

イヤンクツク戦終わり。

文才がないせいか、思いのほか時間がかかってしまった。

## 密林サバイバル？（前書き）

今回の話は少し重要かな？

## 密林サバイバル？

現在俺は荷馬車の中で二ヶ月分の疲れが一気に出たみたいで、ぐでーっと寝転がっている。ギルバードは俺の腹の上で丸くなってる。二ヶ月一緒に密林サバイバルしたお陰でギルバードも小さいなりに大型モンスターとしての風格が段々と出てきているみたいだ。

ギルバードと一緒にゴロゴロしてたら、迎えに来てくれたハンターの人が呆れ返ってこちらを見てるが全然気にしない。なんで俺が今こんな状況になってるか回想スタート。

何時も通り洞窟の中で目を覚ました俺。二ヶ月もの密林で過ごしてきたお陰で、生き物の気配を感じる能力は自然と身についていた。イヤンクックとの戦闘後、何日かしてランポスの群れにも遭遇したり、二匹目のイヤンクックにも遭遇。初戦闘の時と同じく頭を狙い続けた。そのかいあってか短時間で倒すこともできた。二度目の戦闘を楽に終わらせたことによって「密林の王、ヒロトはここに誕生した！」とか大声で言ってみたら、ギルバードに軽くブレスを吐かれた。（こいつ何言ってるの？）見たいな目で言われた気がした。

で。

その気配を感じる能力もあり、今日は洞窟外で何時もとは違う雰囲気を感じた俺は何時でも動けるようにしていた。

五分ほど経っただろうか。見慣れぬハンターがこちらに歩いてき

ているのが見えた。

全身をキザミシリーズを纏い、太刀である『鬼斬破』を背負っているハンター。見ただけでも凄腕ハンターというのがわかる。そいつは俺の前に着いた途端、俺に向かって話し出した。

「おめでとう、二ヶ月の任務ご苦労だった。私は大長老に君を迎えに行く役割を命令された、ザンギという者だ。…ささ、準備をしてすぐにでもドンドルマに戻るんじゃないか。そちらで寝転がってるレウスも一緒に」

「はあ、わかりました。俺の名前は……っといらないみたいですね」

寝転がっているギルバードを軽く揺すって起こし、最低限の荷物を纏める。この密林の中で剥ぎ取った素材は勿論持って帰る。食料は…いらないか。ギルバードは、肩車だ。

ある程度の荷物を持って洞窟外に出る。ザンギさんは兜を脱いで、煙草のような物を吸っていた。俺の姿を見ると、煙草の火を消し、地面に放り投げ、再度兜を被り立ち上がった。

「準備は出来たかい…しかしレウスに肩車をやるなんて、この世界でも君一人だろうねえ」

「ああ、えっと一応名前があるんで『ギルバード』と呼んでくれませんか？名前で呼ばれるほうがこいつも嬉しいみたいなんです」

「『ギルバード』……うん、良い名前だ。大長老にも聞いたが、凄い人懐っこいモンスターなんだね」

「ええ、そうですね。今ではすっかり相棒ですよ」

「相棒！これは驚いた！……モンスターを相棒なんていう人も初めて見たよ！っといかんいかん、歩きながら話そうか。荷馬車まであまり距離はないがね」

そこからは、二ヶ月もの間どのようなことをし、どんな体験をしたかを話したが「うん。全部知ってる」と言われたんだが続けて「二ヶ月、僕は君をずっと監視していたんだ。大長老に言われてね」

「マジですか！」

「うん、マジ。……いや、見ていて面白かったよ。まさか単身で、レウスを肩車しながらイヤンクツクを倒すなんて凄いことだ。大長老に報告しに行った時は大長老も含め、イゼアとクリアが凄い驚いてたぐらいだからね」

笑いながらもすんげえー話するな。このおっさん。

つまりあれか？最初の頃、モンスターとの遭遇率が少なかったのはこの人のお陰なのか？そこんとこ聞いてみたんだが案の定、その通りのようだ。

本人は笑っていたが、気持ちを込めてお礼を言った。ザンギさんは一瞬キョトンとしていたようだが、「ああ、全然いいよ。そんなこと、むしろ僕がお礼を言いたいぐらいだ」と言ってくれる。

なんて懐の暖かい人だと本気で思った。

ザンギさんの言うとおり、荷馬車まですぐに到着することができた。

二ヶ月ぶりの密林外。

「生きてて良かった…」

涙が出そうになったので慌てて目を隠す。幸いザンギさんには見られてなくて安心した。

「さあ、乗ってくれ。疲れてると思うから君は寝ててもいいよ」

「本当ですか？じゃあお言葉に甘えて」

そう言われたと同時に渡された回復薬のようなものを飲んだ瞬間、俺は泥のように眠ってしまった。

意識を失う瞬間感じた違和感は何だったんだろうか……。

気のせいかなザンギさんが薄く笑っているような感じもした……。



## 密林サバイバル？（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

突っ込む所が多々ある話でしたが、まあ作者の妄想小説なんで勘弁してください。気配を感じる能力も、人間誰でも持つてると思いますし。

んで、最後のほうの文章ですが。

いつか忘れましたが、後書きに急展開予告をしたはずです。それをそのままの形で実行させて頂きました。

海の上で（前書き）

じいじ

## 海の上で

深い睡眠から目覚めた俺。あれ？確か俺は荷馬車に乗ってなかったっけ？あるえー？なんでベットに寝かされてんの？見回してみると小さな部屋のような。んで、なぜか部屋が一定の揺れを起こしている。

もしかして知らないうちに密林で怪我でもしてたのかな。幻覚作用的な。

立ち上がってみることにした。なんら体に変化なし。ギルバードはどこにいるのかなと探してみたら、これまた小さな机の上で仰向けで寝てました。

恐らくここはドンドルマの街で、宿屋なのだろう。荷馬車で寝すぎた俺を起こさずここに運び込んでくれたんだろうと思ったので、部屋を出てザンギさんにお礼を言いに行くことに。

あるえー？本日二回目のあるえーです。

俺の目の前には広大な海。どうやら船に乗っていたようですね。やっぱり幻覚見てるのかな？と頭抱えてたら、誰かに肩を叩かれたので振り向いてみることに。

ザンギさんでした。密林で見た服装ではなく、海の男スタイルみ

たいな服。

で、急に俺の前で膝を折って両手を地面に置く。いわゆる土下座。

「本当に申し訳ない！すまない！ごめん！許して！」

いきなり何言いますか？さっぱり事情が飲み込めないんですけど。

「大長老からは君をドンドルマに送る任務を任されていたんだが、君の類稀なる才能を見て思ったんだ。君なら僕の故郷を救えると！」

「えーっと、事情はよくわかりませんが。…つまり俺はあなたに拉致られたってことですか？」

「すまない、その通りだ。だが、僕の故郷を救ってくれたら必ず礼はする。だから許してくれ」

NOと言えない日本人なので…

「ああ、えっと。俺なんかでよけ「本当かい！？」…はい」

「良かった！これで村を救うことが出来るよ」

「取り合えず…この船が何処に向かっているのかを知りたいのですが」

「ああ、そうだったね。『モガの村』だよ。海に囲まれた村でね。漁業が盛んな村なんだ、小さな村だけどとても賑やかな村だよ」

何時の間にか土下座の体制から直ってるザンギさん。  
ていうかモガの村っていったら、MONSTER HUNTER 3

の村じゃん。思わず「はわわー」って言いたくなる。でもここに口  
リ軍師はいない。異世界というなら恋姫の世界にも行きたいなあ…  
…。

あーでも、イゼアとクリア・大長老に結構迷惑かけてるなあ。俺  
の所為じゃないけど、いつか会ったら思いつ切りごめんなさいしよ  
う。

「……………でね。……………聞いてるかい？」

「ああ、すみません。聞いてます」

おっと、一人で思考してる間にザンギさんがなにやら喋っていた  
ようだ。

「それで、実はモガの村の隣には、『モガの森』っていう自由に採  
取・狩りを行うことが出来る場所があるんだけど……………」

「どうしたんですか？」

なにやら思案顔。またまた嫌な予感がする。

「…いや別に何も無いんだけど。ヒロトくんにお願いがあつてね、  
聞いてくれるかい？」

「はい、俺で良かったら」

「うん、ヒロトくんじゃないと駄目なんだが。……………ヒロトくんには  
ね、期間は短いがまた一ヶ月ほど、モガの村の南にある孤島でサバ  
イバルをしてほしいんだ。前回の密林は中型モンスター以上のモン

スターは出なかったが、今回の場所は普通に大型モンスターが出てくるんだ。運が悪ければリオルス・リオレイアとか出てくるんじゃないのかな」

「H A H A H A、またまたそんな冗談を」

「いや、本気なんだ」

おお。急に顔を近づけないでほしい。てかまたですか？ザンギさんはレウス・レイアがどうの言ってるけど、孤島って言ったらやつぱり『海の王者ラギアクルス』じゃないの？

何日か忘れたけど、中型モンスターのイャンクックしか倒したところのない初級ハンターである俺に言うお願いじゃないだろ…。

しかし俺はNOと言えない日本人。そして押しに弱い。もう頷くしかなかった。この時程自分を恨んだことはない。

「本当かい！やってくれるのかい！いやー嬉しいよ。ささ、モガの村までまだ距離はあるから部屋でゆっくりしていなよ」

「はい、お言葉に甘えて」

あーうーあーとゾンビのような足取りで部屋に向かう俺。どこで間違っただろう。神様、俺は何か悪いことしましたか？

ガチャッ

部屋に入る。ギルバードはまだ寝てる。

そついや気がつかなかったが、今の俺は完全日本に居たときと同じ状態。武器や防具は隅のほくに置かれていた。

ボスンッ

とベットにうつ伏せで倒れる。

（あゝそういや俺が剥ぎ取った素材どこにあるんだろう、MH3ではイャンクックは出てこなかったからもしかして村の物々交換とかに使われるかも。…まあそれはそれでいいけど）

本当に波乱万丈な生き方するな…とか思いながら、すぐに寝ました。

## ーードンドルマの街

大長老室で大長老、イゼア・クリア。今回の拉致事件のことで集合していた。

「今回のヒロトくん誘拐事件についてイゼアよ。何かわかるかの？」

大長老の声が部屋に響く。

イゼアが今回のことについて大長老に述べる。

「はい。今回の首謀者はザンギ。これは俺の推測ですが、ヒロトの才能にでも目をつけたんじゃないでしょうか。そうじゃなければヒロトを拉致する理由が浮かびません」

「ふむ、やはりそうか。ならば恐らくヒロトくんはモガ地方に誘拐

されたと思つて間違いないだろう。近年あの地方はある災害に巻き込まれておるしのう。そしてその災害がモンスターが原因とわかつてヒロトくんを拉致したんじやろう」

「英雄にでもしたて上げるつもりなんですかね」

「でもヒロト君は多分、断らないんじゃないかな。そんな気がするよ?」

「ああ、クリアの言うとおりだ。多分あいつは断らん。短い付き合いだが、ヒロトの性格は把握してるし」

「ふむ。モガ地方で大きな都市といえば『砂塵の大都市ロックラック』じゃろつな。そしてヒロトくんは『モガの村』……。全く不憫な子じゃな」

「全くです。ザンギを一発本気で殴りたいぐらいです」

「それじゃあ私は、全身に散弾を当てようかな」

「まあ、ザンギのことはまだ後日じゃ。問題はヒロトくん。今から搜索隊を出して救出に向かわせることも出来る。じゃが、わしは出さん方がいいと思う。二人はどうじゃ?」

「出さないに賛成です」

「私も」

「ヒロトには色々な経験をさせるべきですからね。ましてや目標が、死の山とも言われているグラム火山ですから。それにヒロトには必



ず成し遂げなければいけない目標もあります。そう簡単には死なないでしょう」

「うむ。その通りじゃ！…ではこの一件について後日呼び出すかもしれぬが、集まってもらって悪かったの。解散してよいぞ」

「わかりました。では失礼します」

「失礼します」

主人公がこの会話を見ていたら恐らく涙をながしていただろう……。

## 海の上で（後書き）

全く本当に不憫な主人公ですね（笑）

ああ、そだ。

最初に持っていたヒロトくん愛用の弓と矢のことですが、ちゃっかり荷馬車に積まれてました。ので今も船の、ヒロトくんがいる部屋にあります。

相変わらず空気になっている弓と矢ですが、そのうち洋弓についての説明もしたいと思います。

いまさらですが、誤字・脱字があったら報告お願いします。

## 海の上で？（前書き）

少し遅くなってしまいました。

## 海の上で？

広大な海が広がっているのを船の上で見る。

暇なので改めて自分の今の状態を見てみることにしよう。なぜ、こんなことをするのかは暇だからという意味だけではない。密林サバイバルの時もそうだったが、こちらの世界に着てからの俺の身体スペックは現代日本に居た時よりも高い。

イャンクック戦の時はレウスの子供を肩車しながら勝利した。まだ体格が小さいとはいえ全身をハンター装備で固めたうえ、火竜の子供を肩車して動くなんて、現代日本に居た俺では到底動くことさえ出来ないだろう。

最初、イゼアにこのハンター装備貰い、装備した時はかなり重かったのを覚えている。しかし、密林サバイバルが始まった時にはすでに重さなど感じなかった。もしかして寝ている内に体力が上がるスキルでも持っているのか？そしてイャンクック戦の時の敏捷性。

結構長い時間考えていたけど、さっぱりわからないので諦めることにしよう。まだまだ謎は深まるばかりだが何時か必ず説明してやる。

しかし、やることがない。

ギルバードとじゃれあっていよう。のでギルバードを肩から下ろ

し、離れる。

「おいで〜」

呼んでみるとテテテつとこちらに来て「きゆるー！」とひと鳴きしながら、すんごい楽しそうな目で俺に擦り寄ってくる。

繰り返して遊んで気が付いたら、一時間程ギルバードと戯れていたらしい。遊びは後半鬼ごっこみたいになっていたが、ギルバードとまともに遊んだことはなかったので、楽しかった。たまにはこういうのもいいものだ。ギルバードも大分楽しかったようで、今は俺の腕の中で寝ている。寝る子は育つのだ。

ぐーっと俺の腹が鳴ったのを確認して飯でも食べに行こう。念のため言うが今はお昼だ。

なので食堂がある地下に向かうことにしたが、なにやら食堂周辺で騒ぎがする。腹は減っているが、面倒ザンギさんことは嫌なので早々に退散しようと回れ右したら目の前に疫病神がいた。

「なにやら、不吉な言い回しを言わなかったかい？」

「いえ、何も」

「そうかい。ところでいいとこに来たね、ヒロトくん。…お願いがあるんで少しいいかな？」

「いえ、朝からお腹壊しているので辞退させて頂きます」ペコリ

「いやいや、さっきギルバードとあんなにはしゃいでいたじゃないか。そんなに遠慮しないで僕のお願いを聞いてくれよ」

「いえ、その実は朝から頭が「実はね、今この船の上で食料問題が発生しているんだ。だからいつちよ海にでて魚やらモンスターやら狩りに行ってくれないかな?」…いや、そのだから頭が痛くて」

「ははは、何事も経験だよ。…それじゃあ僕は船長にヒロトくんのことを報告しに行くから、ご飯よろしくね」

……… 思いつきりシカトされた。ていうか何事も経験て何? まだ二ヶ月しかハンターしてない俺にいきなり海中戦しろと!? ラギアクルス級の大型モンスター出たらどないせーっちゅうねん。やつぱり疫病神で決定だわ、あの人。

てなわけで、俺は現在ハンター装備。ナイフじゃ心配だから、疫病神<sup>ンギさん</sup>の鬼斬破をほぼ無理やり貸してもらった。何事も経験です。…ぶっちゃけ太刀を使いたかっただけです。でも鬼斬破って雷属性だから海の中で使ったら俺まで感電するとかないのかな。…まあいいや。そのときは疫病神<sup>ザンギさん</sup>を責めよう。

後はゴーグルを目に装着。ちなみにギルバードはお留守番。

と、いうわけで。

「レッツ!トライ!」

バsshャーン!!

掛け声と共に海の中に潜る俺。

はい、またここで俺の身体スペックの疑問が増えました。まず一

つ。全身装備してるのに全く重さを感じない。二つ目は、水の中なのに、息切れを起こす気配が全然ない。余裕のよっちゃんだ。

日本では水泳を習ったので、クロールと平泳ぎを駆使して海底へと進んでいく。ある程度進んだところで、止まって周囲を見る。下斜め左に鯨発見。鬼斬破に手を添え、気づかれないように近づくが、ここは海の中だ。陸地とは違い、水を掻く音がバリバリするの、あつという間に気づかれる。

こちらに気づいて大きな口を開けて突進してくるが、そうはイカのキン。突進を軽く避けて、鬼斬破で思いつきり斬りつける。斬りつけたと同時に、電気が発生して鯨が麻痺を起こしているようで、動けないみたいだ。

チャンスなので、息絶えるまで攻撃。…無事食料ゲット。

というわけで、食料を見つけたら訓練という名の狩をして、お陰様で六体の鯨を手に入れた。

鯨ばっかだが、贅沢はなしだ。こちらとていつ大型モンスターが来るかわからないので、早く船に戻るとしよう。

船に戻った時は、食料の多さと鯨ばかりということ結構騒がしかったが、昼飯が手に入ったのが嬉しかったのか皆さん、とても喜んでいらっしやった。船に上がった途端ギルバードが小走りで、こちらに走ってきた時は不覚にも萌えた。

しかし俺が海で狩をしている間、船の船員達も釣りで、マグロやら、イカやら、長靴やら釣っていたようなので、鯨以外にも食べる物はあるのを知った時は驚いた。俺行った意味ないじゃんとか思ったけど、良い経験しかないーか。

「いやあ、お疲れさま。どうだった？初めての海中戦は？」

なにやらザンギさんが笑顔でこちらに聞いてきた。

借りていた鬼斬破を返して言う。

「ええ、良い経験をしたので楽しかったですよ。案外水中でも軽く動けましたし。太刀も初めて使いましたが、かなりやりやすかったです。今後とも使っていきたいと思います」

「そうかい、それは良かった。…しかし、水中でも軽く動けたのか…。本当にヒロトくんは凄いね。これは本当に僕の村を救ってくれそうだよ」

「はあ、ありがとうございます」

この後は食堂で魚料理を食べて、夕食の時も魚料理を食べて。疲れたので寝ます。と、だけ伝えて自分の部屋でギルバードと並んで寝た。



海の上で？（後書き）

ぶっちゃんけ次の話の繋ぎで書きました。

## モガの村（前書き）

どんどんハイスペックになるんじゃないかと思っています。

## モガの村

何時間も部屋でうつ伏せで寝てたら、ボチャン！っといかりでも落としたような音がしたので、モガの村に着いたのだろう。

起き上がってハンター装備を装着。ナイフは腰に刺して、なぜか置いてあった弓と矢も手で持っていく。ギルバードを起こして肩車をしようと思ち上げようとしたら、器用に自分から登ってきた。

部屋を出て外へと向かう。村を一目見ようと意気揚々と村を探す… ついでにザンギも探す。

ザンギは見つからなかったが、村は見つけることができた。

水上に組まれた足場の上に建ち並ぶ木造の家や、手作りの風車。

栈橋にはたくさんさんの船が泊まり、遠景には遺跡らしき姿も。

自然の中に溶け込んだ緩やかな時間の流れる場所のようだ。ナマでも見るとやはり違うものだ。

ボーッと眺めていると二人の人物がこちらに歩いてくるのが見えた。ついでにザンギもこちらに歩いてきている。

一人は緑の羽織のような物を纏い、上半身裸、下はちよつとエロい。キセルのような物も持っている高齢の爺さんだ。

もう一人は頼もしそうな体付きをするおじちゃん。腕を組みながらこちらに歩いてくるが、高齢の爺さんとは違って、ちゃんと服は着ている。

「この坊主がそうか？ザンギよ」

「ええ、そうです。こう見てもすごく頼りになりますよ」

「……………」

上からエロい爺さん。ザンギ。おじちゃんである。  
ちなみにおじちゃんはこちらを凝視しています。

「ヒロトくん。こちらがこの村の村長である、ラダナ村長だ。そしてこちらの人が村長の息子である、ラッシュさん。当分お世話になる御二人だから挨拶を」

「ああ〜えつと…ハンター歴二ヶ月のヒロトと申します。よろしく  
お願いします」

ぐだりながら答える俺にラッシュさんとやらがますます見てくる。  
ラダナ村長はニヤついている。ザンギさんは…どうでもいいや。

「…………ヒロトくんと言っのかい？」

突然ラッシュさんがこちらを見てきた。

「はい。そうですけど、そうされました？」

「…いい男<sup>ボソ</sup>」

「はい？なにが言いました？」

「いや、何でもない。挨拶が遅れたね、私の名前はラッシュという。  
以後よろしく」

何やら不吉な言葉が聞こえた気がしたが、気にしないほうがいい  
と思った……。

差し出される手を握り返すが、物凄い力で握り返される。

「はい、よろしく願いします」

そこからは、村の施設・隣接する森林地帯の説明を、村を回りながら受けた。各施設を受ける度に人の良さそうな村人達に自己紹介して回る。

工房に着いたときは、ザンギが所持していた俺のヤンクック素材を工房の職人に渡していた。渡しているときにキラキラした目で見てきているが気にしない。そんなに珍しいのかな？

確かにMH3にヤンクックは出てこなかった。この地方にはイヤンクックはいないということなのか。ならば合点がつく。

職人には恐らく初めて見た素材なのだろう。

各々の説明を受けたところで、俺の泊まる場所へと向かう。三人は外に待機だ。丸い小屋で中には大きなベット。右隅にアイテムボックスがあり、左には食事を食べるための円形の机・イス。今まで泊まった部屋よりかなり豪華に見える。俺にもとうとうマイハウスが貰えたのだ。

今日はこのまま旅の疲れを癒せということで、明日からは早速孤島でのサバイバルをしていくとのことだ。

なので今日はこのまま何をしても許されるらしい。俺はこのままでは暇なのでモガの森に向かうことにした。途中、ラッシュュさんにモガの森で採取や狩での素材は村の中央にある、物々交換所で交換

することが出来るというのを教えてもらうことができた。また詳しい説明は実際に行ってから言うらしい。

村を出て長い上り坂を上がると、木の門で出来た入り口がある。両端には松明が萌えている…じゃない燃えている。

ライターは密林サバイバル以来、常に持ち歩いているので火を消して木だけ持っていこう。

入り口を出て、坂を上り終わると数匹のケルビがいた。こちらに気づいてなく、自由に草を食べている。

ケルビの角は意外とレアだった気がするので、何匹か狩している。近づいていくとこちらに気づいたようで警戒しているようだ。ギルバードは…寝ている。落ちないように俺の頭にしっかりとしがみ付いている。器用だな…。まあいいや。そのうちギルバードにも狩を教えよう。

腰のナイフを気づかれぬように抜いて、十分近づいたら一気に間合いを詰めてケルビに突き刺す。どうやら急所に当たったようで静かに倒れこむ。この調子で後二匹狩ったら剥ぎ取っていこう。

結果、『ケルビの角』4個、『ケルビの皮』5枚をゲットした。ケルビの皮は後で交換するが、角のほうは確か『いにしえの秘薬』を作るために必要だったはずなので、マイハウスに保存する。素材は腰に着けている網袋の中に。

ケルビに夢中で気が付かなかったが、真直ぐ行くと崖になっている。だが景色がかなりいい。カメラがあれば撮っていきたいくらいだ。左の小道から違う場所へと行けるみたいだな。

小道を出ると『ジャギイ』三体。…本当に恐竜みたいですね。MH3になってから急に恐竜系に変わりましたよね。何ででしょうか？それともこの地方は恐竜がメインなのでしょうか。…まあいいや。

ランポスと同じ要領で軽くないし、素材を剥ぎ取る。ケルビの時と同様、網袋に入れる。

「キー！」という聞いたらぞくつとしそうな声が聞こえたのでその方向を見ると、でっかい四本足の虫がいた。凄く気持ち悪いので、素早く離脱するために走る。

ある程度走ったところで、ジャギイの親玉である『ドスジャギイ』がこちらに向かって走ってくるが、所詮ジャギイのデカイ版。なんの恐怖もない。正直かなり弱いと感じた。素材を忘れずに剥ぎ取って、網袋にIN。

「今日は、こんなもんでいいか。…いいよな？明日からまた一ヶ月サバイバルなんだ。ちよつとぐらい早く寝てもいいよね？」

「ゲル！」

お返事ありがとう。ギルバードの了承も得たので、早く帰りましょう。

来た道を戻り、使わなかった松明を戻して村へと帰る。

物々交換所で、ケルビ・ジャギイ・ドスジャギイの素材を全部渡したら、代わりに『回復薬』五本、『強走薬』二本を貰った。渡した素材よりも良い物を貰ったので、明日から始まるサバイバルに使う。

んで、マイハウスまで誰にも会わずに帰り、軽く夕食を食べてギルバードを胸に抱いて寝た。



## モガの村（後書き）

次から孤島サバイバル。

主人公には大型モンスターといっぱい戦闘してもらおうwwww

## モガの村？（前書き）

こんなありえない！っと思う話になったけど…妄想小説だから大丈夫！

## モガの村？

朝起きたらラツシュさんの顔があった……。

「おはよう、ヒロトくん」

「…はい、おはようございます。…ラツシュさん、なぜここに？」

「野暮な質問だね、君を起こしにきたんだよ。そしたら凄い気持ちよさそうに寝ていたんでね、顔を見ていたんだ」

「はあ、そうですか。ありがとうございます」

こんな感じで話は終わったが、あのまま俺が起きなければどうなっていたのだろうか。……深く考えないようにしよう。そして

常に警戒しておこう。掘られるかもしれないしな。

そのままギルバードを起こしてマイハウスで飯を食べて、外に出る。

今日はザンギさんによる一ヶ月孤島でサバイバルするための準備だ。昼頃には孤島に行き、一人取り残されることになる。

「おはよう、昨日はよく眠れたかい？今日は待ちに待ったサバイバルだね。無事に生き残ってくれよ？君にはこの村を救う義務があるんだからね」

前からザンギさんが歩いてきた。

「はい、わかってますが。一つ聞いてもよろしいでしょうか？」

「ああ、いいとも」

「その村を救うことなんです、何から救うのですか？」

「……その質問にはまだ答えられない。君が一ヶ月、無事に帰ってきたときに話すつもりなんだ。すまない」

俺からの質問で少し顔をしかめたが、どうやら色々あるみたいだな。これ以上は聞かないでおくか。

んで、何時の間にか俺の隣にいたラッシュさんはいなくなってるわけで。

「それじゃあ、サバイバルに向けての準備なんだが……。前回の密林とは違い、今回は少々難易度が高くてね、君の持つ武器ではかなり苦労するかもしれない。だ・か・ら！今から工房に行って、君専用の武器を選んでもらう。」

「本当ですか！？ついにナイフ卒業ですか？」

「ああ、そうだとも。普通はナイフ一本でモンスターに挑む人なんていないくらいだし、ヒロトくんは本当に凄いだよ？」

「……自覚はないですね」

自覚なんて最初から無かった。ただ、生き残るために無我夢中でやったことなんだ。あの時はかなり必死だったからな。

ザンギさんと並んで歩いて工房に向かうが、村自体小さいのですぐ着く。昨日は一人しか居なかった工房だが、今日はもう一人小さ

な老人がいる。ドンドルマの大長老の髭無しバージョンのように見えるが、人間ってわけでもなさそうだ。名は、ロオウという名前らしい。

工房には二種類あり、武器屋と加工屋がある。今回用になるのは武器屋のほうだ。老人には直接的な用はないが、どうやら俺に興味津々みたいだ。…決して性的な意味ではない。

「その坊主があ昨日イャンクツクの素材を持ってきたあ奴か」

「ええ、そうです。今日は孤島でサバイバルしてもらったための武器を選びに来ました」

「ああ、話は聞いている。しかし、本当にレウスを肩車してんだな。正直半信半疑だったんだが……。こりやまたたいした坊主だなあ」

「はあ…どうも」

「じゃあ坊主。おまえさんは何いいんだ？大剣か？太刀か？片手剣か？それともランスか？意表についてガンランスか？そうじゃ

なかったら……ハンマーか？…後残ったのは、ライトボウガンにへビィボウガンだな。……ああそうだ、おめえ変わった弓を持つてるんだったな。今度みせてくれねえか？大型モンスターを倒せるくらい強化してやるぜ。なんなら今からでも強化してやりたいが、お前さんは今日からサバイバルなんだってな。いや、大変だなあ坊主も。しかしこれも才能って奴かねえ…。まあ頑張んな。

俺はおめえが生きて帰ってくることを祈ってるよ。といっても……」

凄いよくしゃべるロオウさんですね。結構年いってそうなのに。やはり元気が一番なのか、この世界の老人は化け物か！

「自分は今、片手剣と太刀しか経験がないので…。この二つなら戦い慣れているので」

「そうだよねえ。しかも太刀の初経験は海の中だったし、それでもちゃんと普通のハンター並みに使えていたし。良い事思いついた。腰に片手剣装備して…あ、盾は勿論なし、んで太刀を背負う。重量的にも二つ合わせて大剣と同じぐらいの重さだしね」

「それは結構無謀じゃないですか？」

「いやいや、ヒロトくんならきつと出来るよ！僕は信じてる。はい！ということで…ロオウさん！決まりましたよ！」

「うんぬんかんぬん…あ？決まっただとそれを早く言いやがれ。…で？どうするんだあ？」

「はい。取り合えず今ある太刀と片手剣を見せてください」

「……おいおいまさか二つ同時に装備するとかじゃあないよな？」

「そのまさかです」

「坊主…おめえ本当に度胸あるなあ。まさか同時に二つの武器を装備しようとする奴なんて初めてみたぜ」

「…ありがとうございます」

あつという間に話は進められ、結局俺は太刀と片手剣を同時に装備することにした。

「太刀で今出せるのはあ『天下無双刀』『飛竜刀【紅葉】』…だな。後は屑武器ばっかだ」

「……随分奮発するんですね、ロオウさん。今の二つ…結構いい太刀ですよ」

そりゃそうだ。なんでこの二つが置いてあるのかが疑問だ。

「奮発なんてしてねえ、俺は村長に聞いたんだ。こいつが村を救うとかなんとか、正直疑っていたんだがな、こいつならなんとかしてくれそうでな。つまり俺はこいつに期待してんだ」

「良かったですね…ヒロトくん。…それでは僕はこの辺で失礼するよ、村長に今日の話を話しに行かないと駄目だからね。武器を選び終わった頃に迎えに来るから」

そう言っでザンギさんはスタコラと行ってしまった。

さて。

人生最大の二択になったわけだが、将来的に見てもここはやはり『天下無双刀』だろう。強化していけば『天上下無双刀』になるんだ。そして二つ目の『飛竜刀【紅葉】』だが、強化していけば『飛竜刀【椿】』だ。威力的にはこちらのほうが強い。しかし、属性が火だからレウス・レイアには通用しない。…やはりここは無属性

である『天下無双刀』を選ぼう。

「……決めました。『天下無双刀』にします」

「おうわかった。なら持ってくるから少し待ってな」

軽い足取りで工房の中に入っていく口オウさん。少し時間が空いて戻ってきた口オウさんには大きな布を巻いている物を持ってきた。布を目の前で取り、俺はそれを見て感動した。

「…これが『天下無双刀』よ。強化していけば、最上業物と言われた『天上下無双刀』になる刀だ。しかし、この『天下無双刀』でも切れないものはない！と言われた程の名刀だ。…今日からこの刀の主人はおめえさんだ、大事にしな」

刀を受け取り、黒い鞘に収められた刀引く。黒一色に赤色が散りばめられた刀で刃の部分は赤い。持つと手が馴染む。まるで昔から持っていたような…そんな気がした。

「気に入ったようだな、んじゃあ刀を背負ってみな。おまえさんの身長ならギリギリ足りるだろ」

取り合えず、肩車してるギルバードを下ろして刀を背中に背負う。ベルトで固定したところ、まるで重さを感じない。…いや、ナイフより少し重いぐらいか。

「…重さはどうだ？」

「軽い…ですね…」



「やはりか、まあいいじやろ。似合っていてなによりだな…」

「それじゃあ次は片手剣だな。この様子じゃあ本当に二つ同時に装備できそうだからな。こっちは結構奮発してやるわい」

「本当ですか？でもいいんでしょうか？今日初めて会った人間にここまで奮発してくれて…」

「さつきも言ったが、俺はおまえさんに期待してるんだ。もう同じ説明はしねえ。俺がお前を気に入ってるんだ、野暮なことはもう言うな」

本当にいい人だな。あ、涙出てきそう。

「それじゃあ片手剣だが、俺の工房でもかなりいい奴をくれてやる。…俺が昔ハンターやってた頃のお古だが、やはり今ハンターをして、尚且つ俺のお気に入りのおまえさんならくれてやってもいい！！今持ってくるからちよいと待っておきな！！」

一瞬で俺の前から消え去り、一瞬で俺の前に現れたロオウさんは銀色の刃の剣を持ってきてくれた。

「…昔、俺が愛用していた伝説の金竜銀竜の素材を用いた片手剣の『煌竜剣』じゃ。これも無属性じゃが、片手剣にしては絶大な攻撃力を持っておる。これを使ってくれい」

「ありがたく貰います…」

お礼を言い、腰に『煌竜剣』を付ける。…大したことの無い重さだ。これなら余裕でモンスターを倒せる。

「ここで終わりかと思ったたらまだあるようだ。ロオウさんはなにやらブツブツ言っている。」

「坊主：武器はもう十分と言っていいほどだが、防具はどうする？ そのハンター装備じゃあ何かと苦勞するぞ。武器程良い防具はないが、ハンター装備よりかはマシの防具がある。こればかりはタダではあげれんが、おまえさんが持ってきたイヤンクツクの防具と交換ということなら、あげてやってもいい」

「この防具はイゼアに貰った初めてのハンター装備だ。イゼアはこの装備でリオウスに勝った。：防具は欲しいが、イゼアに貰ったこの防具を軽々と捨てられないので今回はやめておくことに。」

「：すみませんロオウさん。この防具は知人から貰った愛着のある装備なのです。だからこの他の防具はいらないです。：でも俺が限界を感じた時にまたこのお話をさて貰ってもいいでしょうか？」

「：そうか。ちなみにその知人の名前は？」

「イゼアという俺の命の恩人です」

「ふむ、イゼア。イゼアなら聞いたことあるな。結構有名なハンターと知り合いなんだな坊主。：：：：わかった！坊主が無事生きて帰ってきたときにもう一度この話をする！だから死ぬんじゃねえぞ！」

「わかりました！」

用事はこれで終わりなのでロオウさんに軽くお礼を言ってその場

から立ち去る。と同時にイゼアかこちらに来た。約束どおり迎えに来てくれたようだ。俺が持っていた、太刀と片手剣にひどく驚き、そして羨ましそうにしていたが。

マイハウスで軽く飯を食べ、持ち物を準備する。以前貰った回復薬と強走薬は勿論持つていく。餓別としてザンギさんに貰った薬草を防具の外側にあるポーチに入れる。

ギルバードについてだが、これからは極力肩車しないことにした。自分の力で狩などができないと後々苦勞するからだ。危なくなつた時だけ、肩車して戦うことにする。

このことをゆっくりギルバードに話したら「きゆる！」と一鳴き。わかつてくれたみたいでよかった。

時間になつたので港に向かうことに。今回は孤島なので船で行かなければならない。1、2時間程で着くらしい。

港には出迎えのためにカザンギ・ラダナ村長・ラツシュさんがいる。ラツシュさんはなぜか涙を流しており、ハンカチを口で噛んでいる。

三人に「……いつてらっしゃい」「」と言われたので「いつてきます」と答える。

船に乗り、船頭さんに挨拶をし、数十人の船員によって船を漕ぐ。あつという間にモガの村は見えなくなる。

船に乗り一時間程しただろうか、目的の島が見えてきた。外見からしてかなり大きな島だ。これからあそこで一ヶ月サバイバルを思うとなぜか気持ちが高鳴った。

そして船があともう少しで孤島に着きそうになった付近で急に船が止まった。なぜだろうと船が下に聞くとところ…ここからは泳いで行け。らしい。

取り合えず船頭と船員に挨拶をし、ギルバードを肩車して泳いで行くことにした。

途中、『ルドロス』とかいう恐竜に襲われたが、天下無双刀で真つ二つに切ってやった。武器二つでも戦えることが証明できたので、俺の心はますますハイテンションに。

そしてオリンピック選手並みの早さで孤島に着いた俺を出迎えたのは…『クルペッコ』の群れでした……。

モガの村？（後書き）

次から孤島サバイバル。

はい。いきなりピンチですね。

## モンスター設定（前書き）

今回は今まで登場したモンスターの設定を書きました。  
ついでに主人公と相棒のギルバードのことも。

## モンスター設定

モンスター？

名称：リオレウス

種別：飛竜種

巢を中心に生息する飛竜の雄。

森丘で確認することが多い。

別名『空の王』とも言われている通り、主に空中をテリトリーとしている。

足爪には猛毒がある。

モンスター？

名称：ディアブロス

種別：飛竜種

砂漠に生息している。

巨大な二本の角を持つ飛竜。

地面の砂をかき分け地中に潜り、獲物の足もとから襲い掛かる。

非常に攻撃的でプライドが高く、人間から攻撃を受けると、猛烈な怒気を発することが多い。

モンスター？

名称：イヤンクック

種別：鳥竜種

鳥型の飛竜。

立派な顎と、怒るとひらく大きな耳が特徴。

聴覚が優れる面、大きな音にはめっぽう弱い。

飛竜の割に小柄で、逃げ足が早い。

モンスター？

名称：クルペッコ

種別：鳥竜種

独特な色彩を持った、中型の鳥竜種。

大きなクチバシで、巧みに水中の魚を捕らえる。

また胸元と頭部に備わった発声器官から、他のモンスターの声や特殊な音を発することもある。

危険を感じると、飛竜など他のモンスターの声をマネて呼び寄せるといふ。

モンスター？

名称：ランポス

種別：鳥竜種

青い鱗が特徴の小型の肉食モンスター。

攻撃的な性格で、集団で狩りを行うため、囲まれると危険。

密林や森丘などに多く生息している。

モンスター？

名称：ガレオス

種別：魚竜種



砂漠に群れて生息する飛竜。  
砂中に潜り、砂漠を泳ぐ。

滅多に地上には姿を出さないが、彼らの聴覚に衝撃を与えることができる…。

モンスター？

名称：モス

種別：草食種

名の由来どおり、体にはコケなどの菌類が繁殖しているブタ。

大好物のキノコを探して徘徊し、彼らが鼻を鳴らしている場所ではキノコが採れる可能性が高いともいわれる。

怒ると突進してくるので注意。

モンスター？

名称：ケルビ

種別：草食種

シカのような草食モンスター。

臆病ですぐ逃げてしまうため、その角は貴重である。

食用として狩られることも多く、固くしまった肉質は癖になる歯ごたえ。

モンスター？

名称：ルドロス

種別：海竜種

体躯の大きなロアルドロスに率いられた中型の海竜種モンスターで、“水生獣”とも呼ばれる。たいていは複数で行動し、狩りも行う。

雄のような立派な鱗は発達していないが、餌と見れば陸に上がることも厭わない。

むしろ水中では非常に高い運動能力を発揮するため、比較的小型のモンスターと言えど、駆け出しのハンターにとっては大きな脅威となり得る相手である。

――二ヶ月後の主人公とギルバード

？山代寛人

この世界ではヒロトと名乗っている。

適応能力の高さゆえか、この世界での成長速度が早い。ので、太刀と片手剣を同時に装備するというゲームではありなような事をする。顔は中の上。

身長・体重は現代日本に居た時よりも成長している。

好きなもの：自分とギルバード

嫌いなもの：理不尽なこと言う人・疫病神

称号：『ヘタレ』

『NOと言えない日本人』

『竜に懷かれる』

?ギルバード(雄)

ヒロトに拾われた時はまだ赤ん坊だったが、二月月サバイバルにより赤ん坊から子供にランクアップ。

常日頃、主人公に肩車か抱っこされてる。

まだ小さいがブレスも吐ける。

好きなもの：主人公

嫌いなもの：主人公に敵対するもの

称号：『援護射撃』

## モンスター設定（後書き）

他の登場人物はまた後日。

そのうち故郷編？も投入します。

## 孤島サバイバル（前書き）

長いと思います。

どうぞ。

## 孤島サバイバル

何と言う事だ、こいつは発達した発声器官で飛竜など他のモンスターの声をマネて呼び寄せることが出来るという特殊な技を持っている。

こんな所で、大型モンスターなんて呼ばれたら絶対絶命。というか中型モンスターの群れを相手に戦うのも無理だ。

よって……。三十六計逃げるに如かず!!

威嚇の咆哮をし、翼の先端にある火打石鳴らし俺に対しての完全な攻撃態勢に入ったようだ。

俺は久々の野生スタイルで構えて集中する。

大半がこちらに突進。残りは恐らく俺のことを様子見。何かあればすぐにでも他のモンスターを呼び出すつもりだろう。

ちなみに俺は日本でMH3も腐るほどプレイしたのでクルペッコの攻撃パターンを把握している。

というわけで俺はクルペッコの攻撃を掻い潜り、野性的勘でモンスターはいない方向に真直ぐ突っ走る。

「あばよ!とつつあゝん!!」

後ろから思いっきり追いかけてきてるが、後ろは見ない!前を見る!……ギルバードよ、俺がこんなにしんどい目にあってるのに、肩の上で寝るのは勘弁してもらいたい。

まだ後ろから足音が聞こえる。ドドドドドド！みたいな感じ。追いつかれたら今度こそ死んでしまう。なので視界に入ってくる障害物を避けて避けて避けまくってクルペッコの群れの追撃を逃げる。ここでも俺のオリンピック選手並みの能力を魅せる。

あっという間に追ってくるクルペッコによる追撃はなくなる。走ってる最中の後ろからの足音がなくなったので、安心して後ろを振り向くが、どうやら撒いたようだ。

「ふははははははははは……ゲホッゲホッ……ははは」

疲れたっていうのに馬鹿笑いしたのでむせてしまった。アホな事はやめよう……。

無我夢中で走り続けていたのここはどこでしょうか。あいにくモンスターの行動パターンは一緒でも、島の全貌はわからない。ゲームでは一部しか行動できないからな。

つまりは前回の密林の時もそうだったが、今回の孤島も自分が一体どこにいるのかわからないのだ。っというわけでただいま迷子中です。相変わらずギルバードは寝てるし……そろそろ起こすか。

ぺちぺちと叩きギルバードを起こす。

「きゅるっ？」

「ごめん、悪いけどここからは自分で歩いてくれないか？……言っただろ？これからは危ない時だけ肩車するって」

「きゅっ…」

そんな可愛らしい声出しても駄目！約束したもん！

「ほらほら、休憩の時にいっぱい可愛がってやるからそんな声出さない」

「きゅるるる」

渋々肩から降りるギルバード。仕方なしにもう一度ごめんなつと言いながら頭を撫でる。

わかってくれたようでこちらを見上げてくる。

やっぱり賢い子だな……。

とてとて…とてとて…つとて…「きゅる…」…とてとて……。

今日の寝床を探すために、先を急ぐ。

が！後ろからついてくるギルバードが可愛いすぎる…。

途中こけたようなので慌てて助ける。マジ可愛いんですけどこの生き物…。

前回の密林ではすぐに寝床が見つかったが、今回はなかなか見つからない。昼頃にここに着いて、もうすぐで夕方だ。このまま夜になると非常にやばい。俺には暗視ゴーグルなんて持ってないし、わかるとすれば動物の気配だけ。



ガサガサッ！

バツと音のした方を振り向く。…そこに居たのは『ルドロス』。ここに来る途中も出くわしたが、あの時は海の中。だが今回は陸！

「この俺に陸上戦を挑むとは！浅はかなり！」

つと背負っている太刀で先手必勝をしようとしたが、逸早く先にギルバードがブレスを吐く。

……俺は太刀で斬りつけるのをやめて、このまま傍観することにした。せっかくギルバードが自分から攻撃したんだ、俺はこのままギルバードを見守ることにした。勿論危険になれば肩車フォーメンションに入って助け出す。

「グルルルル」

自分よりも体格の小さいギルバードに対して警戒の声を出すルドロス。

「きゅるるる……きゅわ！」

ルドロスが攻撃するよりも早くにもう一度ブレスを吐くが、なんなく避けられてしまう。

だが、相手が避けることをわかっていたのだらう。ルドロスが避けた瞬間にギルバードが大きく跳んでルドロスに噛み付く。が、その選択はまずい、ルドロスは体を回転させることでギルバードを振

り下ろす……。このままじゃやばいな……。

……『ルドロス』は、ああ見えても中型モンスター。……やはりまだ荷が重いかな……。

目の前でルドロスがギルバードを押し倒し、その牙で俺の相棒を噛み付こうしたがそうはさせん！

素早くルドロスを蹴り飛ばし、ギルバードを助ける。

持ち上げて肩車ポジションに移行。戦闘で疲れているせいなあまりしがみついてくれない。……落ちそうで心配なので、抱っこの形に変更。

しかしこのままでは太刀を扱うのは少し大変。よって口オウさんから受け継いだ『煌竜剣』で間に合わせる。

煌竜剣を右手で持って、ルドロスに大きく踏み込む！ルドロスが俺に合わして口を開けながら突進してくるが、予想していたので右ステップでかわす。煌竜剣を逆手に持ってから空きになった背中に突き刺す。

「デメエは今日の晩飯だ！！」

はい。なぜか戦闘になると口調が変わるんですね。でもこれは多分ギルバードを攻撃しようとしたことへの怒り。

突き刺した所で思いつき手前に切り裂く。結果、ルドロスの胴体は半分切り裂かれ、絶命。

余裕の勝利で晩飯を手に入れた俺はルドロスの下半身を小さく切り刻み、持ち運べるぐらいのサイズにする。持ってきていた網袋に入れて、肉の柔らかそうな部分は全てギルバードにあげる。

ギルバードが食べ終えたのを確認してから、もう一度寝床探しを続けることに。歩きながら今回のギルバードの初戦闘について考える。やはり初めは小型モンスターから慣れさせていこう。俺みたいにモスやケルビ相手だとちょうどいいだろう。

そこから、肉食モンスターであるランポス辺りにぶつけさせるが、俺の場合だとこのまま中型モンスターであるイャンクックと戦闘したが、この島にイャンクックはいないだろう。……考えれるモンスターはクルペッコしかない。

勿論、中型モンスターとの戦闘は俺が十分だと判断した上で戦わせる。しかしクルペッコには一つの技がある、胸元と頭部に備わった発声器官から飛竜など他のモンスターの声をマネて呼び寄せるという技だ。

もし、戦闘中に大型モンスターなど呼ばれたら大変だ。俺の時はイャンクックの他に邪魔など入らなかった。だが今回は……。

こうなつてくるとどんどん不安が出てくるので一旦考えをやめる。今は寝床を探し出すことだけを考える……。

随分歩いた……まだ寝床は見つからない。マジでヤバイな……。

必死で周囲を見渡す……。今気づいたんだが、俺達の周囲は森。も一度あの浜辺に戻るか？……いや今更戻る道なんてわからない、

余計迷う可能性もある。っていうか随分歩いているのにクルペッコの時とルドロス以外のモンスターと全く出くわさないのは何故だろうか…。

胸に抱いているギルバードをチラ見する。こちらを可愛いらしい目で見ているが、もしかしたらギルバードの存在が影響しているのか？ギルバードはまだ小さいが、あの『空の王』とまで言われた存在。……ここまで出くわさないことを考えてみれば何かあるとしか思えない。

（ああ、くそ！考え出したら止まらないな俺は。こんなキャラだっけ？俺って）

頭をげしげしと掻く。

（全く、この世界に来てから考えてばかりだな）

もう考えるのをやめて今やるべきことを確認する。

大分横道に逸れた。何回も言うが、今やるべきことは寢床を探すこと。

（……ついに夜になったか。…心なしか周囲の気配が濃くなったな…まるで何処からか見張られているような気がし、寒気がする）

歩いても歩いても周囲の景色は変わらない。

気分は富士の樹海に迷い込んだ気分だ。…ギルバードは寝てる。まあいいけど。

……ふと思いついたんだが、俺は今まで洞窟を探していた。  
しかし無理して洞窟を探さなくてもいいじゃないか？

周囲は森で囲まれており、自分がどの位置にいるのか全くわからない。位置がすぐに把握できる所と言えば高い場所だ。

……………木の上はどうだろうか、木の上ならば位置を確認することができる。

『プレデター』という映画を思い浮かべながら手頃な木を探す。勿論大きなスペースがある場所をだ。

三十分ほど上を見ながら歩いていたが、漸く手頃な木を見つけることが出来た。持ち前の身体能力を使ってスルスルと木を攀じ登る。寝転がれるスペースまで来たので、寝転がることにする。

ドツと疲れが押し掛かってきたが、晩飯を食べていないので網袋からルドロスの肉を生で食べる。

酷い味がしたが、吐き出さないように飲み込み、繰り返す。

胸の中でギルバードがスヤスヤと寝ているのを確認し周囲の安全も確認をした後、気絶するように寝てしまった。



## 孤島サバイバル（後書き）

あゝやっと書き終わった。  
という訳で、俺は寝ます。

孤島サバイバル？（前書き）

どうぞ ^ ^



## 孤島サバイバル？

「あー、米食いてえ」

只今、木の上で朝ご飯の準備をしています。

一応木の上なんで燃やすものは大量にあるので木に火が燃え移らないように煌竜剣を下に引いて、上に木の皮を重ねるように積み重ね、木の棒に刺したルドロスの生肉を焼いてる最中です。

昨日は疲れたから生肉のまま食べてしまったけど今日は時間的にも体力的にも余裕がある。少しぐらい贅沢してもいいだろう。

肉が良い匂いを始めたので、食べ頃と思い一口。…別に美味しくもなく不味くもない、そんな味だ。

「おいおい、ギルバードさんや。…食いすぎとちやいますかな？」

「きゅるう？」

「もう俺の分が少し少ないのです。ちょっとは気を使ってくれたら嬉しいかな……なんて……」

「……………zzz」

ええ！寝た！

……いつからギャグが出来るようになったのですか！？マジ人間みてえだな……。

こんなやり取りしてるけど、半分以上ギルバードさんが食べちゃったので、俺の分はもうほんの少し。

しょーがない。昼にたらふく食べばいいかあ。

眠気も覚めて片付けもして今日のプランをたてて準備運動もして、木の上から降りるためにギルバードを肩車する。

昨日と今日で使った場所だがやっぱり木の上は嫌。昨日は全然気づかなかったけど今朝起きたら顔や体の所々に虫がくっ付いていたんだよ。何を隠そう俺は、虫恐怖症になったわけだ。…でもランゴスタとかカンタロスとか大きい虫ならまだ耐えられる。小さい虫は断固拒否します。それが俺クオリティー！。

ってなわけで今日のプランは食料を確保しつつもギルバードの経験地を稼ぎ寝床を探すこと。

やっぱり洞窟がいいよ。安心して横になれるしね。

ギルバードのことは小型モンスターの相手だけやらせて後は俺が相手するでーや。中型モンスターだと昨日みたいなことが起こる可能性もあるしまだまだ経験不足だしね。

んで、これは朝木の一番上まで登って確認したことなんだが、どうもこの島の大きさが半端なく広い。ここからは俺の仮説だが、MH3のフィールドにはまず、孤島・砂原・水没林・火山・凍土。そ

して今俺がいる孤島。木の上からの確認による結果見間違いかもしれないが山がある方面がうつすら赤かった。それにいかにもジメジメしてそんな場所もあった。さすがに砂漠みたいなところは探しても見当たらなかったが、多分この孤島には、水没林・火山のフィードがあるのだろう。水没林のある場所は雨が降っているだけなのかもしれないが。

正直好都合だと思った。久々だが、俺の故郷に帰るための電車はグラム火山という場所にあるらしいし、この一ヶ月の期間で火山がどういふ場所かなどを体験できる。勿論、戦闘面でも慣れていたほうが後々役に立つかもしれない。

火山もそうだが、水没林でもそうだ。水の中の戦闘を俺は多く積みたいと思っている。『ラギアクルス』や『チャナガブル』対策だ。後でもう一度木の上に登って確認しよう。

考え事も区切りがついたので天下無双刀を背負い、煌竜剣も腰に装着して木を降りる。

スタツ

と軽く着地して周囲の確認。

「うん、異常なし。…さて！ギルバードよ。歩こつか」

「きゅー！」

うむ！今日は嫌がらず素直に歩いてきている。

二十分ぐらい？歩いたところでようやく景色が変わった。大きな広場のような場所で左にはでかい滝があり大きな湖がある。結構深い。い。

密林サバイバルで使ったのと同じ竿を使って二三匹釣つていこう  
 と思い、周辺の草むらをあさつて虫を探す。イモムシを見つけたの  
 で釣り始めるが、キレアジしか釣れないのはなぜだろうか。

…… まあ、砥石の代わりにもなるからいいけど。二匹釣れたから網袋の中に入れた所で背後大きな気配が近づいてくる気がしたので咄嗟に湖の中に入る。

危険を察知したのか、ギルバードもおとなしく入る。

バツサバツサバツサ……ズウウウウン！！！！

湖からギルバードと滝の裏から頭だけ出して、何が来たのを確認したが……。

「げえええええええええ！」

見てはいけないものを見てしまったので声が出そうになった口を慌てて水の中に入ることとで抑える。

恐らく夫婦なんだろう。離れてはいるが圧倒的な圧力を感じる。」

雄飛竜リオレウス』と『雌火竜リオレイア』がいた…。リオレウスの足下には絶命しているランポス二頭。

「(……近くに巣でもあるのか？…それとも飯を食いに来ただけか？)」

目の前で食い千切られるランポス二頭。返り血が跳ねて辺り一面ランポスの血で溢れている。ぶっちゃけかなりグロイんだが騒いで見つかったら終わりなので黙らなければいけない。

ギルバードを庇いながらレウス・レイア相手にするなんてまず不可能。自殺行為だ。なので今は気配を消すことに集中する。

やり方は某ハンター漫画を見てね！

・・・しばらくお待ちください・・・

やっとお食事タイムが終わったのか夫婦揃って大きな欠伸をする。  
…この展開は少々やばいかもです。

腹が膨れたようなのでその場所で大きな体を横にして仲良く寝始めました。まだ俺とギルバードは湖の中にいます。長いこと水の中に入っているので手がふやけてきている。

俺の脳内では会議が行われ、二つの選択肢案が出された。

その？：そ〜つと湖から上がって、そ〜つとこの場から退却。  
その？：レウス・レイアが起きるまで我慢。

？は却下。運が悪ければ見つかる可能性大。

…よって？の選択肢に決定。というわけで実行します。

念のためギルバードを腕で固定して、一旦水の中に入って浅瀬の  
ほうまで近づく。ゆっくりと頭から体と匍匐<sup>ほふく</sup>前進で水の中から極力  
音を立てないように上がる。……この時気分はスネーク。

んでゆっくり立ち上がって忍び足でこの場から去る。熟睡してい  
るようなので案外楽勝だった。いつかまた出会って戦闘することに  
なるかもしれないのを予感したが、そうならないよう後で神にお祈  
りしておこう。

「（ふふふふ……性欲を持て余す……）」

無事生き残ることができてちよつとテンション高め。固定してた  
ギルバードを放して再び歩かせるために降ろし今度は周囲に気配を  
探りながら移動開始。

でも俺はヘタレでチキンなので先程釣ったキレアジで研ぎ研ぎタ  
イム。やり方なんてわからないので、綺麗に整ったら研ぎタイム終  
了だ。いつモンスターと遭遇するかわからないからな…。

で。凄く時間が飛んで。今俺は畳四畳半ぐらいの小さな洞窟でギルバードと共にケルビの肉をガツガツ食べてます。血を補給しないといけないんです。…ちなみに外は豪雨並みの雨。

え？なんでいきなり場面が変わったのかって？それはあれです、そのほうがわかりやすいと思ったからです。ここに至るまで色んなことがあったので……。

……すみません、回想シーン入ります。

〽三時間前

ギルバードとテクテク散歩の気分で行いてたら、前方に雑草？を食ってるケルビの群れを発見したので。

「GO！ギルバード！」

掛け声と共にその小さな体でケルビの群れに突進。ケルビはこちらを一瞥だけしたが、脅威と感じなかったのか完全無視。

ふ、甘いな。その余裕が死に繋がるんだ……。

「ギルバード！火炎放射！」

ケモンマスターを目指している少年を真似て攻撃の合図をしてみるのが、ギルバードが出来るのはブレスだけ。火炎放射など出来るはずもなく、予想通り小さなブレスをケルビ目掛けて吐き出す。

ちなみに俺は後方で待機。勿論周囲にケルビ以外のモンスターがいないかの確認はしてます。

ギルバードのブレスは運良く一匹だけ当たった。

：こうかはばつぐんだ！：ギルバードはケルビをたおした。ギルバードは20のけいけんちをてにいった。

#### 補足説明

ケルビは切断・打撃・弾・火・水・氷・雷がかなり有効であり、龍属性は効きません。

すみません、どうでもよかったですね。

この後仲間が倒されたことで怒ったケルビがギルバードに角で攻撃してきたが、一匹倒したことで自身がついたのか、それとも元々戦闘の才能があるのか、なんなく二匹目三匹目とブレスで丸焦げにしていた。



ケルビの群れはこちらに警戒のひと鳴きした後、森林の方向へ逃げていった。

結局手に入れたのはケルビの肉と角。ケルビの皮を全て剥いで細かいパーツに分割していく。角を取るのも忘れない。この作業も最初は長い時間を使っていたが、慣れたせいで短時間でバラバラにすることが出来た。

当初に比べれば大きな進歩だ。誰か俺を褒めてくれ…。

「きゅるるう」

「ん？どうした？」

ふとギルバードが空を見た。

朝は快晴だったが何時の間にか曇りになっており、今にも雨が降りそうな感じの空だ。

「（これは早めに休憩できそうな場所見つけないとやばいな……）」

あっという間に曇り空から、雨が降り出した。夕立並みの勢いで、結構きつい。今まで通っていた道も増水で川になり、歩けなくなっ

た。ので、俺は仕方なくぬかるんでいるが茂みの多い道を歩いている。

ギルバードも雨のせいでしょっちゅうこけてたので、肩車している。だが、ぬかるんだ道を歩いたのが駄目だったのか、バシャン！と大きな音を立てて川の中に落ちてしまった。茂みの多いところを歩いてたのが逆に悪かったのだ。幸い、ギルバードは落ちずに済んだみたいだった。

あまりにも急なことだったので、慌てて水面に上がろうとするが…。

「！！！」

何処からかはわからないが、強烈な殺気を感じる。それも俺目掛けて。

この気配は大型モンスターの気配だ。さっき遭遇したレウス・レイアと同じくらいの圧力。この世界に来てからの身体スペックの陰で息はなかなか切れないので、落ち着いて尚且つ急いで水面に上がり、ギルバードの傍に向かう。

ギルバードと合流して、すぐさま肩車モード。

天下無双刀を鞘から出し両手に持って何時でも動けるように構える。周囲の確認も忘れず行っ無論川の中もだ。濁ってはいるが、見えない程ではない。

……あまりにも突然だった。一瞬川が光ったと思ったら……紫色の巨体が飛び出してきたんだから……。

「GO A A A A A A A A A A ! ! !」

俺を飲み干そうとする勢いで水の中から出てきた。不規則に並べられた牙がよりいっそう迫力を感じる。あの時水の中で俺に殺気を浴びせたのはこいつだ。隙あれば俺を食い殺そうとしていたんだろ  
う。

灯魚竜チャナガブル

水没林で確認される、独特な姿をしたモンスター。  
平板な外観は魚類に似ており獲物の目をくらませる発光体を頭部に持つことから、“灯魚竜”などと通称される。

体表を水底の色に同化させて擬態し、水草のようなヒゲを巧みに使つて獲物をおびき寄せる。

体長に比して著しく大きな口を開け、周囲の水ごと獲物を吸い込んでしまうこともある。

……こいつで確か見かけによらず素早いんだっただな……

チャナガブルが突進してくるので、俺は思いつ切りしゃがみ込みこむことで、飲み込まれるのを防ぐ。突進する勢いが強すぎたせい  
でその巨体が回転してしまい、陸に上げられた魚のようにピツタン

ボタンと跳ねている。

「さて、『天下無双刀』の初陣と行こうか!!」

「ギルバードも援護射撃頼むよ」

「きゅる!!」

未だにボタンボタン跳ねているので逃さず、踏み込み天下無双刀を上段から勢いよく振り下ろす!!ザシュ!と血が噴出すが、致命傷には全然至らない。

続けざまに横へ一閃!チャナガブルは俺の攻撃で怒ったのか大きな体を回転させることで俺に向き合う形になった。

かみつこうとしてくるが、後ろに下がりながら右から左に一閃したところで一瞬怯んだ隙を突いて、イャンクック戦と同じように頭に飛び乗り、深く深く天下無双刀を突き刺した。

グシュ!グシュウウウ!!

「GOAAAAA!!」

どんなモンスターも頭を攻撃されたら痛い。チャナガブルがあまりの痛さで咆哮を上げているが、凄く嫌な予感がしたので、突き刺すのをやめて地面に降り立った。…俺の攻撃で完全に切れたんだろう。体の至る所から鋭い棘を出し、その姿はフグみたいだ。

ギルバードも援護射撃としてブレスを撃ってくれているが、天候が雨なので効果は薄い。ましてやチャナガブルの弱点は多分雷。火では決して無い。そして今俺が持っているのは無属性の武器だけ。

絶対勝ち目が無い訳じゃない！……が、いきなりの大型モンスターとの戦闘は「ガハッ！！」

考え事をしていたせいで相手の攻撃を見切れなかったため、突進が直撃してしまった。……ぶつかった衝撃を利用してギルバードを木の上に載るよう放り投げる。

後方にあつた木にそのまま叩き付けられ、激痛に苦しみながらもギルバードのほうを確認する……ちゃんと載ってくれている。

…良かった……。そのまま動かないでいてくれよ…。

「GIOAAAAAAAAA!!」

俺に一撃与えたのが余程嬉しいんだろう。この島全体に聞こえるような咆哮を上げる。

「ガフツツ……ハアハア………」

初めて大型モンスターの直撃を食らったので、地面に向かって血を吐いた。今の体制は四つんばい。…すぐ前にチャナガブルがいるのがわかっていのに、体が動いてくれない。逆に立ち上がるうとするとガタガタと膝が震える。

……マジで、やばいな……。



孤島サバイバル？（後書き）

ピンチです。ヤバイです。

戦闘シーン書くの楽しいです。

では次回また！



## 孤島サバイバル？（前書き）

何回も書き直してたら、思いのほか時間かかってしまった……。

## 孤島サバイバル？

雨が降り注ぐ中、一步毎に巨体を動かし、俺の命を奪おうと近づいてくるチャナガブル。

今の俺はチャナガブルによる攻撃をもろにくらってしまったことで、四つん這いの体制から一ミリも動かせていない。頭の中では必死に立ち上がるかと、この状態をなんとかしようと考えるはいるが体が一向に動いてくれないのだ。このままだとマジであの世に逝き掛けない。

とうとう俺の前に来たチャナガブルが大きな口を開け飲み干そうとしてくる……。しかし、思わぬ攻撃によってチャナガブルの巨体がズドン！という大きな音をたてて、チャナガブルが真横に吹っ飛んだ。

赤い鱗で覆われている体。

…俺の前では少し臆病で、甘えん坊だと思ってた相棒がそこにいた。

「…………ギル…バード…？」

小さな体をしているギルバードが、何倍の大きさを持っているチャナガブルを吹き飛ばしたという事実を俺は信じられなかった。確

かに俺はあの時ギルバードを木の上に載せたはずだったんだが……。

それよりもまさかギルバードにあんな力があつたなんてびっくりだ。中型モンスターさえまともに倒せないギルバードが、大型モンスター並の突進をしたのだ。

この数分の間でギルバードは将来『空の王』になるであろう才能は垣間見せたのだ。

考え事をしていた俺にギルバードはトテトテと近づいてくるが、呆然としている俺の顔に翼でビンタ。

「…へ？」

またまた呆然としてる俺に向かって、今度はクチバシで突っついてくる。

「い、いて！いててて…ちょっと！ちょっとタンマ！」

「きゅる！…きゅる！」

リオレウス語は人間である俺には理解できないが…もしかして俺を叱ってるのか？俺が無茶した事に対して。

一通り俺の顔を殴ったギルバードはそっと近づいて俺の胸に擦り寄る。…不思議と心地よかった。

そしてあれだけ動かなかった体がギルバードの渴によって四つん這いの体制から動くことが出来たのだ。

だが、立ち上がることは出来ても体力は戻らないし、傷もかなり深いため、クラクラと意識を失いそうになる。

しかし俺は忘れていた。この孤島に来る前にラッシュさんに回復薬を貰っていることに気づいたのだ。

船で孤島に向かっていく最中に、腰に備え付けておいた緑色の液体の入ったビンを空け、喉をならしながら飲んだ。

飲んだ瞬間にMONSTER HUNTER特有の体をガバツツと上に上げると同時に両手も上に上げガツツポーズ。

重症だと思っていた体の痛みが消え、傷跡はあるが血は出ていない。

回復薬様様である。つつーわけであまり時間も無いことだし、ぱぱつと防具確認。

防具のハンター装備は前正面、腰の装備が重力に負けて剥がれ落ちていた。よって今の状態は頭に腕、足の装備だけ。

全身装備よりも軽くて好都合なのでこのままでいいや。

せつかくイゼアに貰った装備だが命には代えられない。

元々、俺の戦い方は野生スタイル改めスピード重視の戦闘スタイル

ルと思ってるからな……。

……………つとすっかりチャナガブルのことを忘れていたので、吹っ飛んだ方向を見たが、チャナガブルの姿は見えない。吹っ飛ばされた付近を見てみると何か大きなものを引き摺った跡がある。よく見れば血が所々に付着しており明らかにチャナガブルが衰弱していることがわかる。思ったよりもギルバードによる攻撃によって負傷しているのがわかる。

これはチャンスだと思ったので、すぐ行動に移した。天下無双刀を握り締め、今度は考え事なしにチャナガブルの跡を追う。ギルバードも慎重に歩いてくる。

一歩二歩三歩と歩くたびにズズズと巨体を引き摺っているような音が大きくなっていく…。

四歩五歩六歩と音が大きくなるにつれ、チャナガブルの呼吸音までもが聞こえてくる。

「居た……」

そこには俺とギルバードの攻撃を食らった箇所から大量の血を流して必死にその巨体を前へ前へと引き摺っている姿があった。

チャナガブルの向かっている方向は恐らく川でもあるんだろう。  
一旦俺から逃げてまた後日俺に再戦。という形なんだろうな。

だが許さん。逃げるなんて言語道断！

弱っているチャナガブルに渾身の一撃を決めるために、雨に濡れて泥となった地面が破裂したように瞬歩の要領で踏み込む！

空気を切り裂くような音を発しながら天下無双刀を振り下ろす。

「あああああああ！！！」

グジュ！！！ブジュ！！！！

まるでバターのように相手の皮膚から内側に肉が耳障りな音を出す関係ない！！俺は躊躇なくチャナガブルに一閃一閃繊細かつ大胆に、天下無双刀を刻んでいく！

こちらに気づいたチャナガブルが棘を出し、体をこちらに向けて反撃しようとしてくるが時既に遅し。

振り向く瞬間にチャナガブルの右目に刀を突き刺し、左目まで貫かせる！

まだ絶命しない、往生際の悪い奴だ。

「こんちくしょうがあ！！！」

俺は最後の攻撃で突き刺してある刀を外側まで切り裂く。……結果チャナガブルは両方の目が潰れ、尚且つ顔が半分切り裂かれた歪な姿となった。

俺の最後の攻撃がチャナガブルを絶命させたのであろう。…ぴくりとも動かなくなった。

……少々グロい勝ち方だったが、勝ったのでよしとしておく。

「まったく……疲れたな」

「きゅい」

戦闘も終わってひと段落したが、問題は山済みだ。まずチャナガブルの素材はどうするのか、今夜寝る所はどうするのか、このままだと完全に風邪を引く… などなど。

正直言って疲労感はやばいです。でもこのままだとギルバードと共に共倒れで死亡。

雨もなんか豪雨になってきてるし……。

しょうがないから、チャナガブルの素材は無視だ。ゲームでもそんなに強そうな防具でもなかったし、欲しくなったらまた狩りしよう。…出来ればの話だけど。

んで今夜の寝床だけど、地上に見つからないのなら水の中にあるかも…。

というわけで、水中洞窟を探してみよう。水没林のエリアにあつた気がするんだよな。

ゴーグル付けて…。ギルバードに息止めてもらって…。右手で胸に抱いて…。

「レッツ！トライ！！」

豪雨の中での水中遊泳はあぶないが、持ち前の身体スペックがあるので問題無し！

とか思ってる最中に見つけました！入り口のような洞穴を！  
片手平泳ぎ＋バタ足でスイスイと穴に入って行きます。

…やっとこさ穴を抜けた所、ゲームのエリアと同じような洞窟を発見！

少し小さいが何とかいける。ルドロスが二匹と蔓延っているが華麗な太刀テクニクで一発KO。

ケルビの肉もあるが如何せん腹が減ったので今後のための食料になってもらおう。

水から上がって、周辺の草や木を寄せ集め、お馴染みの煌竜剣を下に引いて、ケルビの肉とルドロスの肉を焼く。

が、ライターはすっかりびしょ濡れなのでギルバードの出番だ。



プレスをひと吹きしてもらい、火をつける。

ここまでの所要時間は凡そ三時間。そしてやっと冒頭に戻るわけだ。

ケルビ&ルドロスの肉をギルバードとガツガツ食べて、今日一日を振り返る。

…ギルバードの成長…初めての大型モンスター戦…直撃を食らって死に掛けたこと…豪雨の中での水中遊泳…

……結構無茶してるな俺。故郷に居るお袋が知ったらめっちゃ怒られるかも。

っていうか、今この時間も日本とここは時間軸は同じなのか？…もしそうだとしたら一刻も早く戻らないと、この世界で籍を作ることになるかも…。

「……やっぱり電車を見つけないことだよなあ…。んで確かラグム火山か？そこにも行かないと駄目みたいだし…はあ」

ラグム火山にはミラバルカンの生息地とかなんとか言ってたようだが、絶対に戦いたくない相手だ。マジ無理。死ぬ。不可能。犬死。

まあ…遭遇した場合は全力で逃亡したらいいか。

「きゅううう」

「んあ？どうした？」

何時の間に食い終わったのか、俺の傍に来るギルバード。

この子はいつも食い終わったら寝る子供だ。ボーっと考え事をしていた俺の傍で寝たいんだろう。

俺はそつとギルバードを抱き上げ、胡坐の体制をする。ギルバードは今日、俺の命を助けてくれた。明日以降疲れを残さないように優しく撫でる。不思議とこう撫でていたら疲れが取れる気がしたんだ…。

撫でる度に俺の瞼がどんどん下に降りてくる。

明日の行動を考えていたら何時の間にか寝てた俺でした。



## 孤島サバイバル？（後書き）

チャナガブル戦終了。  
次回は休憩編です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0234m/>

---

故郷に帰る途中で

2010年12月3日11時35分発行